

1880年代における日本陸軍の対清情報活動

— 福島安正を中心として —

澤田次郎

要 旨

本稿は1880年代における参謀本部の対清情報活動の実態を、福島安正中尉（のち大尉）を主軸に据えて考察するものである。ここでは主に以下の3点を検証した。

第一に軍事関連施設の偵察である。まず福島は北京から内モンゴルを、ついで杉山直矢少佐とともに、①上海—南京、②煙台—天津を旅行し、兵要地誌調査を行った。

第二に清国社会の観察である。杉山と福島はそうした過程で農民、商人から官吏に至るまで、さまざまな人々に接触し、自国と清国の違いを実感した。

第三に北京での清国軍のデータ収集である。公使館付武官となった福島は、清国軍の最新データを収集することに努め、重要文書を入手して大量の資料を日本にもたらした。

以上の三つの段階をふまえて、また他の派遣将校たちの情報収集と合わせて、日本陸軍は日清戦争の約10年前から清国軍の全体像をほぼつかむようになっていたのではないかと考えられる。

キーワード：陸軍，参謀本部，情報，諜報，インテリジェンス，清国，福島安正，杉山直矢，隣邦兵備略

目 次

はじめに

1 情報収集活動の実例

(1) 内モンゴル行

(2) 沿岸偵察旅行

2 清国社会の実態観察

3 清国軍の全体像把握

おわりに

はじめに

周知のように1880年代は、清国を中心とする東アジアの伝統的秩序が再編を余儀なくされて変質し、やがて欧米列強を中心とする近代世界に飲み込まれていく過渡期としてゆるがせにできない時期にあたる。対外関係において伝統的な朝貢・冊封関係と近代的な外交関係の2つのシステムを併存させるようになっていた清朝政府は、相次いで外からの挑戦（ロシアのイリ地方占領、

日本の台湾出兵と琉球処分、フランスのベトナム保護国化、英領インドのビルマ併合)を受け、とくに朝鮮については壬午軍乱、甲申政変を経て関与を強めたものの、日清戦争によってこの最後の朝貢国を失い、中華世界は事実上消滅することになる⁽¹⁾。

そうした過程で日本政府の対清・対朝鮮政策に強い衝撃を与えたのが、壬午軍乱であった。1882(明治15)年7月、朝鮮の漢城(現ソウル)において守旧的な興宣大院君一派が煽動する旧式軍隊兵士が反乱を起し、開化政策を進める閔氏政権の高官を殺害したほか、同政権を支援する日本公使館が襲撃され、花房義質公使は脱出帰国を余儀なくされた。この異変に対して日清両国は軍艦を派遣し、清国が軍事力を背景に反乱を鎮定すると、閔氏政権は日本から離れ、清国に接近するようになる。壬午軍乱が発生した当初、日本政府は事件処理に楽観的であったが、清が直ちに兵船を送るという機敏な対応を見せ、強い介入意志を表明したことに大きな衝撃を受け、一種の恐慌状態に陥った。8月に入って事件処理をめぐり清との対立の恐れが生じると、政府は対清開戦を決意するに至り、厳しい緊縮財政方針の下にあるにもかかわらず、清に備えるための軍備拡張方針が決定された。この恐慌状態はその後終息することになるが、翌1883年より日本は本格的な軍備拡張を開始する⁽²⁾。

関誠氏の優れた研究『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』が明らかにしているように、壬午軍乱は日本政府に強い影響を及ぼすとともに、その情報活動の転換点となった。すなわち同事変によって日本の情報関係者や政府指導者層の間で情報体制の貧弱が問題視され、その強化が模索されるようになる。そうした中で比較的早く成果を出したのは、外務省、海軍に先駆け、すでに台湾出兵前後の時期(1873-74、明治6-7年)より組織レベルでの対外情報活動に着手していた陸軍であり、その中心的人物であったのは福島安正(1852-1919年)であった⁽³⁾。壬午軍乱前後の時期、福島は以下のような形で3度、清国を訪れている⁽⁴⁾。

【第1回】 1879(明治12)年8月15日東京出発～同年12月25日帰国(26-27歳)

- ・上海、天津経由で北京着(初の渡清)。さらに内モンゴルのドロンノール(多倫諾爾)を旅行。北京から同じルートで帰朝。

【第2回】 1882(明治15)年9月26日東京出発～1884年11月13日帰国(29-32歳)

- ・上海より南京に至り、さらに海路煙台⁽⁵⁾に上陸、海岸近くを陸行し天津に出て、82年11月22日に北京着。
- ・83年6月2日、在清国公使館付武官に任命される。
- ・84年10月5日北京出発、天津から煙台、牛莊(營口)、上海を経て帰朝。

【第3回】 1885(明治18)年2月28日東京出発～4月28日帰国(32歳)

- ・甲申事変処理のための日清交渉で伊藤博文全権に随行。3月15日天津、19日北京着、4月

18日天津条約締結、翌19日全権にしたがい天津出発。

このうち第1回目と2回目の清国滞在の目的が、参謀本部の命による情報活動にあったことは明らかである。1回目については島貫重節氏の『福島安正と単騎シベリヤ横断』が福島のたどった大まかなルートを紹介しており、現地の古着を身にまとして偽変した彼が、薬の行商人となって北京城内外を歩き回りつつ兵備状況を探っていたこと、さらに隊商一行の中に加わり、内モンゴルのドロンノールを訪ね、張家口を回り、北京への帰路、万里の長城（八達嶺長城と居庸関）を検分したことを記している⁽⁶⁾。しかし2回目の上海—南京、煙台—天津の視察については、島貫氏も福島が山東省の各地を廻ったと指摘する程度にとどまっており、その内容はほとんど明らかにされていない⁽⁷⁾。

また2回目の旅行を終え、そのまま北京に残留し、公使館付武官となった福島が清国軍の現況を調査した『清国兵制類聚』全65巻を編纂する上で、兵部衙門の関係者を誘惑し、下請け作業をさせていたことを島貫氏の著書が詳しく記している。それによると福島は、兵部衙門の呉上尉（大尉）なる人物と親しくなり、同人に「清国軍の現状を知るための新式調査方法を作り出せば、君は進級して多額の給料を得ることができるだろう」と誘惑した。呉上尉はその誘いに乗り、兵部衙門の一室をあてがわれた福島は呉とその部下に調査の手法を指導し、結局11名の官吏を指揮して清国軍の現況に関する調査書の編集作業を進めた。同時に各地方の出先機関から寄せられる定期報告の正確度をチェックすべく各地の関係者を訪ねて点検して廻り、そうして集めたデータをもとに『清国兵制類聚』を完成させ、山県有朋参謀本部長を感嘆させたという⁽⁸⁾。ただし今回筆者が別の資料にあたったところ、当時の福島の活動について別様の情報収集、編集作業の状況が浮かび上がってきた。

なお先述の関氏の研究は、公使館付武官に任命された福島が清国官吏を買収して内部文書を手し、『清国兵制類聚』『清国神機營沿革誌』⁽⁹⁾など膨大な情報資料を作成した上で、「清国ノ兵制ヲ詳悉スルヲ得タリ」との実感を得たことに着目する。さらに1884年の帰国後、福島が『隣邦兵備略』第3版（1889年）を編纂し、その際に清国陸軍の質的側面と量的側面の両面からいって清国は強国とはいえないと判断し、その結果、内政の腐敗した清国が強国化する可能性はないと考え、日清提携論を否定したこと、またその福島による清国停滞論を軍制改革の中核をになう桂太郎少将（総務局長）や川上操六少将（参謀本部次長）が受容していた可能性が高いことを指摘している⁽¹⁰⁾。

このように関氏は北京駐在武官時および帰国後の福島の清国軍分析に着目し、それが陸軍指導部の情勢判断につながっていったのではないかという大きな流れを提示する。ただし同研究では、福島の調査旅行と北京でのデータ編纂作業の実態、ならびにそうした過程で彼の情報活動がいかんにか深化していったかという点については触れられていない。

以上のように壬午軍乱前後の時期の福島、ひいては参謀本部の情報活動については、まだ明ら

かにされていない面、さらに検討を加えるべき余地が残されている。そこで本稿では、1880年代の陸軍参謀本部の対清情報活動の実態を、そのキーパーソンである福島を主軸としながら、さらに踏み込んで検証してみたい。とくに明らかにしたいのは、彼が現地で具体的にどのような活動を行っていたか、それがいかなる形で次の動きにつながっていったのか、また陸軍全体にどういった成果をもたらしたのかという一連のプロセスである。インテリジェンスの基本がヒューミントであるとするならば、その内容をできるだけ明確な形であぶり出すことが本稿のねらいである。

ただし先行研究が明らかにしているように、対清情報収集の先兵となったのは福島だけではない。1880年から88年にかけて福島以外で清国に駐在した将校は、少なく見積もっても37人にのぼる。平均して1年に最低でも12人が同国内で活動していたことになる⁽¹¹⁾。したがって福島はあくまで参謀本部が清国の要所に派遣した将校の中の1人であって、同本部の組織的な情報活動の一端を担う存在にすぎなかったと見ることもできる。しかしながら、そうした中でとくに重要な役割と責任を課せられていたのは、やはり在北京公使館付武官であった福島大尉、ならびに在上海領事官付として他の派遣士官を監督していた管理将校の島弘毅大尉であったといえよう。いうまでもなく北京の福島は清朝政府の政治情報にもっともアクセスしやすく、上海の島は各地から集められる情報を日本に送るハブとしての役目を果たしていた。

また当時の福島は階級でいえば下級将校（歩兵中尉ないし大尉）にすぎず、まだ30歳前後の若さであった。しかし清国に送り込まれた将校のほとんどが少尉から大尉までの尉官であり、彼らが集めた情報を東京の参謀本部管西局で受け取る1人の杉山直矢は少佐であった。そうした多くの若い士官が参謀本部の耳目となっていたが、とりわけ福島は渡清前に参謀本部管西局員をつとめるかたわら山県有朋参謀本部長の伝令使として重用されるなど、早くから山県に目をかけられ、それから20数年後には参謀本部の第二部長、次長として陸軍の諜報工作を指揮するようになる。それゆえこの時期の彼の考え方や経験、判断を考察することによって、明治末期ひいてはそれ以降の日本陸軍の情報戦略の原点ないしは原型をさぐる手がかりをつかめるのではないかと考えられる。そうした問題意識にもとづきながら、以下考察を進めていきたい。

1 情報収集活動の実例

(1) 内モンゴル行

本章では清国に派遣された福島がどのような情報活動を行っていたのか、その具体的な実例を見ていきたい。1879（明治12）年8月、参謀本部管西局員であった福島中尉ははじめて清に派遣され、8月末から12月後半まで約4ヶ月にわたって同国に滞在する。その際に北京の北方、約400km弱に位置する内モンゴルのドロンノールを訪れるが、この旅行を企てたのは9月下旬、北京においてであった。防寒用の旅装（蒲団、毛布、羊皮、外套、靴、風帽など）を整えた福島

は、騾車（ラバが引く車）1輛と御者1名、従者1名を雇い、自身はモンゴル牧馬の市場で購入した白馬にまたがり、北京崇文門内の旅店を出発したという。諜報に従事する者がひととき目立つ白馬に乗るといのは通常考え難いが、実際にそうであったのか、あるいはわざと作り言を述べているのか、そのあたりは判断がつかねる。以下その旅程で判明している部分を掲げる⁽¹²⁾。

【往路：北京からドロンノールまで】

- 10月5日 北京：午前11時30分に崇文門内の旅店を出発、東直門外に宿泊
- 6日 東直門外→孫河を渡る→牛郎山（行程80里、1清里＝約0.5kmとして約40km）
- 7日 牛郎山→（20km）白河を渡る→密雲駅→朝都庄（45km）
- 8日 朝都庄→石匣城→新開嶺、潮河を越える→古北口（30km）
- 9日 古北口に滞留、見学
- 10日 古北口→二塞→十八盤嶺、偏嶺を越える→鞍匠屯（40km）
- 11日 鞍匠屯→（10km余）興州河の溪谷に入る→興州→二間房→波羅腦嶺を越える→波羅腦（25km、風雨と山谷の困難から行程進まず）
- 12日 波羅腦→興州河の溪谷に沿って進む→豊寧県→牛圃子（47.5km）
- 13日 牛圃子→神庙嶺を越える→郭家屯で昼食→灤河を渡る→官地
- 14日 官地→燕窩嶺を越える→再び灤河を渡る→溝門
- 15日 溝門→水泉嶺を越える→（21km）水泉→（27.5km）額爾屯河を渡る→17時ドロンノール着
- * 以上、合計770里/385km

【帰路：ドロンノールから張家口まで】

- 10月19日 ドロンノール出発→哈叭邱（45km）
- 20日 哈叭邱→上都河駅（40km）
- 21日 上都河駅→（20km）→黒土凹で昼食→（22.5km）→張麻井
- 22日 張麻井→（降雪のため道に迷い大きく迂回、本来距離20km）→二道凹
- 23日 二道凹→非房で昼食→白庙子灘（32.5km）
- 24日 白庙子灘→（20km）→十把泰で昼食→（25km）→内モンゴルの境界線を越える→半坦
- 25日 半坦→（3.5～4km「道路最モ険悪」）→（19～19.5km「溪谷最モ狭隘ニシテ両崖頗ル険絶」）→張家口の関門→正午12：00張家口の興隆客店に投宿
- * 以上、合計約500里/250km、当初5日予定のところ、途中降雪のため7日となる。
- * その後、張家口から北京に戻るまでは記録が見当たらない状況である。

以上のように福島は、まず北京からドロンノールに北上し、ドロンノールに実質3日間滞在したあと、南西の張家口に下ったうえで北京に帰還した。上記に細かく記したように、彼は1日40km前後のペースで進み、町村間の移動距離を里単位で記録している。これはのちにも触れるように、彼が乗っている馬ないしは騾車の平均歩数、平均速度をもとに推定して割り出したものであろう。この旅程を通じて福島はコンパスで方位を測りながら距離データをとり、ルート図ひいては手描き原図を作製していた可能性もあるが、それについては確定はできない。

旅行の過程で彼が注目したのは、当然ながらも軍事関連施設であり、ついで町の規模と繁栄の度合いである。また地理上の形勢、道路・河川の状況や道中日印となるものなども押さえている。たとえば北京北東部の密雲県城については「明時〔代〕ノ修築ニシテ周回大約十五里、城門六ヲ通シ、官兵此ニ駐防ス。人口概子五千、貿易稍ヤ繁盛ナリ」としている⁽¹³⁾。また密雲県北東の古北口は万里の長城のふもとにあり、長城の内外を行き来する関門、要害の地として知られ、福島はあえてそこに丸1日滞在し、諸所を観察している。それによると、この古北口は外から京師に牧畜を売りに来る者、天津から熱河、ドロンノール以北に磚茶を運搬する者が通過するため「常ニ最モ繁栄ノ地」であり、「軍務衙門及理事衙門アリ。官兵若干、亦此ニ屯ス」、「長城ハ悉ク煉瓦ヲ以テ之ヲ建築ス。其高サ二三十尺、底寛十五六尺、頂寛十三四尺、前後ニ銃眼ヲ穿チ、所々ニ城櫓ヲ設ク。城櫓ヨリスルニ非ラサレハ壁上ニ登ル能ハス」と目測や歩測によって長城城壁の規模を明らかにしている。またドロンノールに関しては「人口概子二万余、内蒙古中最モ繁盛ノ一都ニシテ貿易甚タ盛ナリ」として主な輸出入品をあげ、この町は独石口、張家口とともに口北三庁と称し、関外の要訣である、「市中ハ街路狭隘ニシテ甚タ清潔ナラス、殊ニ東南市街ト接スルノ地ハ死者ヲ埋葬スルノ所ニシテ、棺櫃道ニ横リ、臭気実ニ禁スヘカラス。又此地、都テ牛馬ノ乾糞ヲ以テ薪炭ニ代用スルカ故ニ、毎朝車輛ニ積載シテ運搬シ来ル者、続々列ヲ為ス」とその生活感を伝えている。

以上のような地誌・軍事・商業・社会情報は参謀本部に蓄積されていったと考えられる。しかしこの調査旅行は決してたやすいものではなく、ドロンノールに向かって北上するにしたがい激しい風に飛ばされる砂礫が顔面に当たり、10月というのに水際には薄氷が張って「激冷骨ニ透る」という状況となった。さらにドロンノールから張家口に下る際は明け方の気温が -7°C 程度で、日中も氷点を上回ることがなく、凍った河の上をラバと車を切り離して慎重に渡らなければならなかった。さらに雪も降り、あまりの寒さに車上でじっとしていることに堪えられなくなった福島は、ほとんど外に出て歩いた。まだ厳冬の寒さ($-10\sim-30^{\circ}\text{C}$)にはほど遠かったとはいえ、福島ははじめての渡清で内モンゴルの厳しい気候の洗礼を受けることになった。このときの体験はのちの単騎シベリア横断の際に、何らかの形で生かされることになったはずである。

また彼を悩ませたのは毎晩宿泊する旅店の不便さであった。部屋は「頗ル不潔」で、室内の床に坑という小穴があり、防寒のためそこで煤炭または獣糞を焚いて土床を熱する仕組みになっていたが、煙筒がないため臭い煙が全室に充満して悩みの種となった。しかもどの旅店にも便所が

ないため室外で排泄を行わなければならない、そこに豚が群がり集まって煩に堪えないという有様であった。そのほかにも寒暖の差が激しいのでおのずと携帯する品数が多くなり、少なくとも驛車一輛は雇わなければならない、その車もスプリングがきいていないため小石に乗るだけで「激動甚タシ」く、悪路の場合は「身体車傍ニ撃衝シ、其困苦実ニ名状スヘカラス」という状況であった。また通貨の両替も一苦労であり、銀貨はいずれも不定形、粗造の銀塊で、鉛や土石を混ぜてあるものもあり、「老練ノ従者ヲ使役スルニ非ンハ屢々為メニ欺カル、事アルヘシ」と福島は注意を促している。

しかし苦あれば楽ありで、ドロンノールにたどり着く直前まで9日間にわたって溪谷の中を進み続けたのち、ようやく視界が開けて水泉嶺の高所から見たものは「以北渺々たる蒙古ノ高原ニシテ、一望際ナク、僅ニ眼ニ觸ル、者ハ牧養牛馬ノ群ニ過キス」という雄大な風景であった。「心頗ル快ヲ覚ヘ」ドロンノールまでの残りの30 km 弱は足取りも軽く、知らず知らずのうちに通り過ぎてしまったという。

先に見たように福島は、万里の長城のふもとの古北口のような戦略上の要衝に着目し、重点的な調査を行ったが、のちの諜報工作活動を考えると、それ以外に見逃すことのできない点がいくつかある。それは第一にチベット仏教との出会いである。ドロンノールは彙宗寺（別名 匯宗寺）、善因寺の二大ラマ廟をもち、内モンゴル最大のチベット仏教の聖地として発展してきた町である。福島は彙宗寺を次のように紹介している。「蒙古地方庫倫ニ次ク所ノ大伽藍ニシテ、信徒大約七百余名、内高僧ト称シ黄衣ヲ穿ツ者一百八十余名、又主領ヲ大喇嘛ト称ス。常ニ之ヲ西藏ニ迎フ。其他概子蒙古人ニシテ清国ノ言語ヲ解スル者稀ナリ。市中ノ居民ハ概子回教ヲ尊信シテ喇嘛教ニ帰スル者ナシ。サレハ該宗ハ単ニ蒙古ノ宗教ト云フヘシ。彙宗寺ノ本堂ハ二層ノ建築ニシテ、楼下ハ大約方十八間、朱髹ノ〔朱い漆を塗った〕円柱四十八本、僧徒大約三百名ヲ坐スヘキノ位置ヲ設ク。聖書ハ都テ西藏字ヲ用ユ。楼上長サ十一間、幅七間余、数十ノ仏像ヲ羅列ス。堂ノ前面ニ鼓樓及鐘樓アリ。又長キ円柱二本ヲ植立シ、其陰ヲ以テ読経ノ時間ヲ示ス。毎歳九月二十七日ヲ以テ大祭ヲ行フ。僧都仮面ヲ被リ、数百列ヲ為シテ市中ヲ徘徊ス」。ドロンノールの描写のうち半分近くのスペースがこの彙宗寺に割かれている。それは同寺院がもともとこの町の中心的存在であるだけでなく、福島の個人的興味を強く引いたからであろう。北京で彼はすでに雍和宮に代表されるチベット仏教寺院を見ていたかもしれないが、内モンゴルにおいてもラマ教が有力で、無視できないものであることを実感したと考えられる。

第二に押さえておきたいのは、モンゴル人との接触である。内モンゴルで現地の人々に接した福島は、彼らを高く評価しなかった。モンゴル人は牛羊の肉を主食とし、牛乳を入れた磚茶、高粱酒を好み、野菜の味はほとんど知らないだけでなくそれを見たことがない者が多いとし、「終身沐浴ヲ為サス、衣服ノ如キハ嘗テ之ヲ洗ハス、故ニ身体最モ不潔ニシテ、臭気鼻ヲ貫キ、蟻虱群ヲ為ス、恰モ草野ノ馬ニ於ルカ如シ。然レトモ体格健強、容貌勇壯ニシテ、自ラ支那人ト別種ヲ為スト雖トモ、此辺居住ノ蒙古人ハ支那人ト接スル日已ニ久シキヲ以テ、漸ク其弊習ニ浸潤シ、

今日ニ至リテハ固有ノ勇氣ト志操ヲ失ヒ、又支那人ノ猾智ナキヲ以テ、蒙古人〔滿洲人の誤りか〕ニモ支那人ニモ及ハサル一種下等ノ人民トナレリ」としている。しかしモンゴル人を自分の目で見ただけの体験は、清帝国に対する彼の視野をさらに押し広げたのではないかと考えられる。

第三にイスラーム教徒との遭遇である。旅店の主人にはイスラーム教を信奉する者もあり、そうした店は入口に「回回」の文字を掲げていたが、福島が雇った御者も回教徒で、麦粉と冷水を持ち歩き、回回店に宿泊しない場合は麦粉に冷水を加えて飢渴をしのいでいた。回教徒の主人に豚肉の有無を問うようなことがあれば、色をなし、黙して答えないことがあるが、「之ヲ他教ノ土人ニ比スレハ更ニ大ニ純良ナリ」と述べているところから見て、福島は回族、回教徒に悪くない印象を受けていたようである。

第四に馬賊の存在を意識するようになったことである。北京を出発して9日目、溝門に宿泊した福島は、その周辺に馬賊が出没することを知った。旅人の中には自衛のため、刀、鎗、火縄銃などを携帯している者もあり、実際に賊に襲われて財貨を奪われた者が路傍に仮葬されているのも見た。ロシアとの戦いにあたって福島らがこの馬賊を利用することを考えるのは、それから25年後のことである。

以上のように福島は内モンゴル行を通じて、チベット仏教寺院を見学し、モンゴル人や回族と接触し、馬賊の存在を比較的身近に感じ取った。つまり漢人以外の民族も含めた清国の多様性を認識したわけである。もちろんそれらの知識は北京でも得られないことはないが、やはり北京を出て、現地でそれを体感したことは、清国をはじめて訪れたばかりの若き日の彼の心に、何らかの種をまいたのではないかと考えられる。

(2) 沿岸偵察旅行

ルートと調査の目的

1882(明治15)年7月、福島中尉は2回目の清国派遣の命を受けた。今回は杉山直矢少佐を同伴した2人1組での調査旅行であった。しかしその直後に壬午軍乱が勃発したため、杉山と福島は急遽朝鮮へ出張を命じられ、翌8月から約1ヶ月の調査にあたる。一旦日本に脱出した花房公使が護衛兵二中隊とともに再び仁川に入る際、杉山、福島の2名(管西局)と瀬戸口重雄大尉、伊藤祐義中尉、菊地節蔵中尉、磯林真三中尉(このあと在朝鮮公使館付初代武官、甲申政変時に殺害される)の4名(管東局)がこれに付けられ、以後「地理実査其他探偵」を行った⁽¹⁴⁾。先に引用した福島自筆の履歴書にも「仁川京城間ノ測量ニ従事」したとある。

帰国して残務整理を終えた杉山と福島は、9月27日から11月22日までの実質2ヶ月弱、予定されていた清国沿岸部の調査旅行を実施した。ルートは大まかにいって、①上海→南京→上海、②上海→煙台→天津→北京の2つに分けられる。このうち上海・南京間の往復、上海から煙台までは河川または海路を利用し、煙台から北京までは陸路を行くという形をとった。さらにそのあと杉山のみ再び南下して、③北京→天津→上海→寧波→上海→福州→廈門→汕頭→香港→広州→

香港→横浜という経路をたどっている。以上の日程とルートをさらに詳しく記すならば以下のようになる。内モンゴル行の際と同様、杉山と福島は町村間の距離を歩測しているが、ここではその数値は省略し、代わりに彼らが概算した宿泊町村の戸数を記載しておく⁽¹⁵⁾。

【1882・明治15年】

① 上海—南京

9月27日 横浜出航

29日 神戸

10月1日 馬関（現・下関）

4日 黄浦江（上海市街下流）に入る

5日 上海，江南機器製造総局（以下，江南製造局と略称）見学

7日 上海出航（以下，南京に向けて汽船で長江を遡る）→鎮江

9日 鎮江→南京

10日 金陵機器局見学

11日 南京出航

12日 上海到着

15日 上海出航（以下海路）

② 煙台—北京

17日 煙台着（「ビーチユ・ホテル」に滞在）

20日 煙台発（以下陸路）→崗崙村（40戸）

21日 崗崙村→登州府（現・山東省蓬莱市）

24日 登州府→黄县城→龍口港（200～300戸）

25日 龍口港→黄山館（10余戸）

26日 黄山館→平里店（400余戸）

27日 平里店→萊州府→沙河（1,000余戸）（現・山東省萊州市沙河鎮）

28日 沙河→新河（約300戸）

29日 新河→寒亭（1,000余戸）

30日 寒亭→濰県→朱劉店（20余戸）

31日 強風暴雨のため出発できず

11月1日 朱劉店→譚家坊（200戸許）

2日 譚家坊→青州府（現・山東省青州市）

3日 青州府→淄河，臨淄县城→呈羔（30余戸）

4日 呈羔→樂安县城→崔家廟（「人烟粗薄ノ寒村」）

- 5日 崔家廟→新店→蒲台城（現・山東省濱州市）
- 6日 蒲台城→（黄河を渡る）→北鎮→濱州城→雙眼井（「一寒村」）
- 7日 旅店主に騙され、雙眼井に滞留
- 8日 雙眼井→（洪水のため村外から小舟に乗る）→水落坡（「寒村」）
- 9日 水落坡→海豊県城（「城内人烟頗ル疎薄」）
- 10日 海豊県城→慶雲県城→王樹
- 11日 王樹→塩山県城→滄州
- 12日 滄州→興濟→王家營
- 13日 王家營→静海県
- 14日 静海県→（大雪のため午後早めに止宿）→梁王庄
- 15日 梁王庄→天津（紫竹林租界のグループ・ホテルに滞在）
- 16日 日本領事館で島村久副領事に面会し、天津機器局東局の見学照会を依頼
- 17日 天津機器局東局の見学につき謝絶を示唆する回答を受ける
- 19日 北京から帰朝の途についた前北京公使館付武官の梶山鼎介少佐と面会
- 20日 天津→蔡村
- 21日 蔡村→張家湾
- 22日 張家湾→北京到着（日本公使館滞在）

③ 北京—香港（杉山少佐のみ）

- 11月23日 北京滞在、城内外と円明園などを見学（～26日）
 - 27日 公使館出発
 - 28日 運河船中泊
 - 29日 天津（グループ・ホテル滞在）
- 12月2日 天津出航
 - 3日 煙台（碇泊のみ、上陸せず）
 - 5日 上海
 - 7日 寧波
 - 9日 寧波出航
 - 10日 上海
 - 15日 上海出航
 - 16日 福州
 - 19日 福州出航
 - 21日 厦門（碇泊のみ、上陸せず）
 - 22日 汕頭

23日 香港

26日 香港→広州

【1883・明治16年】

1月2日 広州→香港

4日 香港出航

10日 横浜到着

くり返しになるが、以上の行程からわかるように、この旅行は清国の沿岸地帯を視察するもので、①上海と南京、②煙台から天津にいたる地域、③上海より南部の地域（寧波から香港・広州まで）の3つの局面を対象としている。

それではこの旅行を通じて、杉山と福島は何を主眼に情報を収集したのであろうか。ここで情報将校を送り出すにあたっての参謀本部の方針を頭に入れておきたい。それはおおむね次のようなものであった⁽¹⁶⁾。まずマクロ（戦略）レベルでは「凡〔ソ〕偵察ハ其国ノ地理風俗ヲ詳カニシ、政教ニ因ル所ヲ明カニシ、推テ以テ兵制強弱貧富ノ勢ヲ攬リ、万緒仔細ニ考究シテ、一朝或ハ盟破レ好絶ユルニ方リ、我軍隊ノ為ニ實際至良ノ便ヲ与ヘン事ヲ予メ計画スルニアリ」。つまり清の国情全般を調べ、その上で軍事力の強弱を推しはかり、有事に備えるというのである。観察対象としては「地形風土」「運輸ノ便否」「糧食薪炭」「被服陣営」（軍隊の被服装具、宿営露営のための品物や原料の産地）「兵制及諸製造所」があげられる（「清国派出将校心得」）。つぎにミクロ（戦術、作戦）レベルでは「支那ニ於テ交戦ス可キ地ト方略トヲ撰定ス可シ」。すなわち「我兵上陸ノ地」、「上陸シタル後ハ本拠トス可キ営所」を選び、「首路ヲ管轄スル城堡或ハ要害」「大河ニ架スル永久橋梁ヲ管轄スル城堡」「山脈ヲ踰ヘテ通過スル敵軍ヲ防遏ス可キ城堡」「要港ニ在テ海面ヲ管轄スル城堡」は「戦略上ノ要地」であるため、看過してはならないとする（「清国派出将校兵略上偵察心得」）。

加えて次のことに注意すべきだという。清国での偵察にあたる者は「努メテ着実ヲ旨トシ」、荒唐無稽な他者の意見に頼らず、「躬自ラ実地ヲ徴シテ以テ支那現時ノ形勢ヲ精覈ニ〔詳しく明らかに〕考究」すべきであって、「苟モ軽忽ニ流レテ粗放ナルハ最モ戒ル所ナリ」（「清国派出将校心得」）。また別の言い方をすると、ある国の軍政上、はじめからそれを軽視するときは取るべきものがあっても捨てて顧みず、それに心酔するときは弊害があっても指摘することができなくなる。「宜ク虚心平気、以テ偏見ヲ除クヘシ」。清国軍隊の編制は旧来の兵法と欧米の法が混じっており、いまだに紀律が整然としていない。しかし清国政府が取捨折衷を行う中で、あるいは二三の宜しきを得るものがあるだろうし、それは兵制だけでなく制度文物も同様である。寸も長きところあり、尺も短きところあり（いかなるものにも一長一短がある）。「探偵上、寧ロ彼ノ短ヲ拾ワンヨリ彼ノ長ニ着目スルトキハ、則チ却テ我ニ裨益アル淺尠ナラス。万一輕視シテ唾棄スル

如キアラハ僻見ヲ免レサルノミナラス、将ニ大害之ヨリ萌サスニ至ラン。其地ニ往クモノ、宜ク心誠目撃シ、努メテ其要領ヲ得ル事ニ注意ス可シ」（「清国派出将校兵略上偵察心得」）。

要するに、先入観や憶測、偏見を排除して虚心坦懐に清国の政治・社会状況の全体をつかみ、とくに軍事戦略上の要衝をおさえよというのである。派遣将校はいずれもこれを読んだ上で現地に向かったと考えられるが、実際、杉山と福島もそれを実践し、後述するように清と戦争になった場合を想定しながら各地域をめぐる、その兵備状況を探っている。

それとともに見逃すことができないのは、煙台から天津にいたる陸路の測量と地図作製である。これより4年前の1878（明治11）年に参謀本部が独立・誕生して以降、多くの将校が清国に派遣されてきたが、その重要任務の一つは地理情報の収集であった。山東省に関しては、1880年に山根武亮少尉が「山東省武定府及德州ヨリ天津及北京ニ至ル圖」を作製していた⁽¹⁷⁾。また81年より酒匂景信中尉が煙台から萊州、膠州を経て山東半島を南下しつつ西進し、江蘇省宿遷県まで測量を行った上で、82年3月に旅行図「従山東省煙台経黄縣萊州膠州安邱縣沂州等至江蘇省宿遷縣漁溝路上圖」を完成させていた⁽¹⁸⁾。しかしながら煙台の西方、萊州から德州を経由しないで天津に向かう沿岸に近いルートについては、参謀本部はまだ多くの情報をもたず、そのうちとくにまだ製図がなされていない地域について杉山と福島に調査を命じたものと考えられる。

当時、清国への派遣将校が測量を行う場合、他者の目に触れることを避けるため、本格的な器具による作業は行わず、遊標つきコンパス（今日のブランドンコンパス程度のもの）で方位をはかり、距離は移動時間あるいは彼らが乗っている馬車や轎（駕籠）の平均歩数、平均速度をもとに推定するという簡易なトラバース測量を基本にしていた。その上で移動を終えた夜に整理を行い、図画に描いたという⁽¹⁹⁾。杉山、福島の手法もこれと同様であっただろう。

煙台から出発するにあたり、彼らは在芝罘（煙台）日本領事館の名誉領事代理ジョージ・F・マクレーン（George F. Mclean）の周旋により、清国人の従者1名、馬夫2名とラバ6頭を雇い入れ、「軸子」（シャンザス）と呼ばれる一種の駕籠に乗った。写真1に見るように、軸子は乾燥したコーリヤンの茎を床に敷き、その上を蓆でドーム型に覆い、前面のみを開けたものである。それを据え付けた台座の前と後をそれぞれラバの鞍に載せるというわけで、写真2のようにラバとラバの縦列の間に軸子が空中に浮いたように連結される形となる。轎（駕籠）の担い手を人間からラバに代えた、一種の幌馬車のようなものであった。写真1では幌の天井が低く描かれているが、実際には写真2に見るように中に人が座れる程度の高さがあり、杉山と福島は少しでも居心地をよくするため、その床に毛布を敷き、行李2、3個を幌の後方に入れて背もたれとし、小刀で幌の左右に破窓を開けて横の景色も見えるようにした。彼らは連日おおむね朝8時から夕方5時まで（途中昼食休憩あり）40 km 前後の距離を、首に鈴をつけたラバの軸子に揺られながら旅をつづける。

窮屈な旅ではあったが、この方法は地理情報の収集に大きく役立ったと考えられる。2人は幌の中に座っているだけでよいので、寒風や歩行で体力を消耗することなく、周囲の観察に専念す

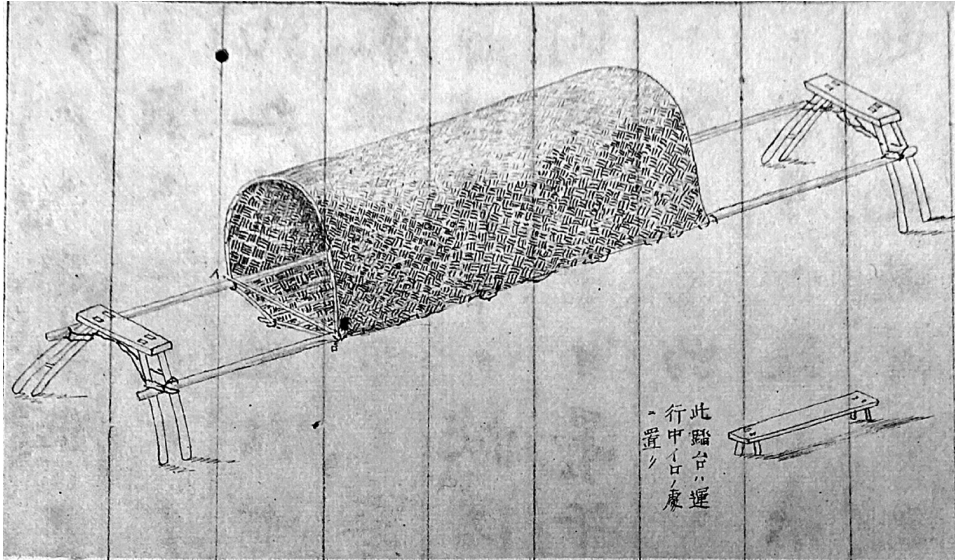


写真1 軸子 (『支那沿岸紀行』第2編, 1882年10月19日)



写真2 軸子 (Charlotte E. Hawes, *New Thrills in Old China*, New York: George H. Doran, 1913, between p. 40 and p. 41.)

ることができた。しかもラバは昼の休憩時間以外はまったく休むことがなく、1分間に平均80mで歩くため、「旅行中地図ヲ製シ紀行ヲ草スルニ頗ル便ナリ」であった⁽²⁰⁾。彼らはラバの平均速度をもとに町や村、集落間の距離を里(清里)単位で記録している。『支那沿岸紀行』第1編に記載された凡例では、1里(清里)＝約500m〔実際には576-8m〕としているので、本稿もそれにしたがうこととする。また目測によるしかない場合、たとえば道幅や川幅は米突(メート

ル)、山・丘・城郭の高さは尺単位で記している。たとえば報告書では次のような記述がたびたび現れる⁽²¹⁾。

朱橋駅ハ新城店ヲ距ル二十里ノ地ニ位シ、朱橋河ノ左岸ニ濱シ、周圍繞壁、人家六百、錢舖質店客棧雜商アリ。近郷売買ノ市場トナシ、黄山館以西第三ノ駅ニシテ、又站中ノ鏘々タルモノナリ。

是ヨリ地勢少シク高く、亦平坦曠潤ノ沃野ニシテ、最モ騎兵ノ駆逐ニ便利ノ地タリ。西行約七里許、一小村ヲ経テ、更ニ約十八里許ノ処、一小沙河ヲ渉リ幾クモナク、又一流河幅約二百米突、流水幅三十米突、深サ十珊知ニ過キスヲ超ヘテ一里許、平里店ニ達ス。此地、亦村落遠近ニ散布シ、楊柳各村ニ鬱々タリ。

こうして集めたデータをもとに手描きの原図が作られたことは間違いないと考えられる。『支那沿岸紀行』第1編の序文には「路上図」を附すという断り書きがなされており、報告書とあわせて地図も管西局に提出されていたことがわかる。しかし残念ながら、拓殖大学文京図書館所蔵の資料群にはそれが含まれていない。『附録 煙津沿道地誌』の本文には以下のような山東省、直隸省内の原図が付けられていたことが明示されている。

第2号路上図 龍口港ならびに近傍

第1号路上図 青州府→樂安県(約50 km)

第1号路上図 樂安県→蒲台県(約57.5 km)

第3号路上図 水落坡→海豊県(約27.5 km)

第3号路上図 海豊県→慶雲県(約21 km)〔以上、山東省〕

第4号路上図 塩山県→滄州故城(約25 km)〔直隸省〕

第1号から4号まで総計180 km以上となるが、経路は連続しているわけではなく、ところどころ中断している。それは「既ニ多ク前者ノ製図アルヲ以テ之ニ接続スル部分ノミヲ調製セシカ故ナリ」という理由からであった⁽²²⁾。ここから逆に下記のルートはすでに地図ができあがっていたことがわかる。すなわち、煙台→龍口港、龍口港近傍→青州府、蒲台県→水落坡、慶雲県→塩山県、滄州故城→天津である。それをたどってみると、先にあげた山根武亮少尉、酒匂景信中尉以外の先人もこの作業に従事していたのではないかということが推察できる。対清戦争を想定する場合、山東半島は遼東半島と並んで渤海を封鎖し、上陸作戦を展開する上で重要な戦略拠点となるから、同地周辺における日本陸軍の兵要地誌調査は早くから進んでいたことがうかがえる。杉山と福島はその一翼を担い、まだ着手されていない部分の原図を作製するという使命を帯びていたわけである。

以上見てきたように、杉山、福島は、主として清国沿岸地帯の兵備状況をさぐることに、および煙台から天津間の原因の空白部分を埋めることという、主に2つの任務を遂行するため派遣されたといえる。地図作製については上で述べたので、以下彼らの軍事調査について見ていきたい。その際に予備知識として、清末の清国陸軍の概要をあらかじめ頭に入れておく必要がある。当時の同軍は、①八旗（満洲王朝子飼いの近衛軍団）、②緑營（旧明朝の遺兵を整理改編したもの）、③勇營（八旗、緑營が形骸化する中で在郷の紳士階級が組織した軍）の3つに大別できる。以下その概略を記しておく⁽²³⁾。

① 八旗

兵力約20万人とされ、明朝を滅ぼした清朝譜代の満洲人部隊が中核で、のちモンゴル人、漢人も加わり、満洲八旗、蒙古八旗、漢軍八旗があった。北京の皇帝と宮城を警護する近衛兵にあたるのが**禁旅八旗**である。皇帝のお膝元である直隸省にはそのほかに幾輔駐防も置かれた。さらに直隸省以外の諸省・地域の戦略要点にはそれぞれ集中的に**駐防八旗**が配置された。しかし八旗は太平に慣れ、金を出して人に当番を代わってもらうのが普遍的になるなど軍紀が弛緩し、本来の戦闘力を失っていった。その一方で人口増加や物価高騰により旗兵の生活は困窮し、亡くなった兵士の名の下に1人の寡婦をつけ、その寡婦が100歳まで生きたことにして、別の者が給米を受け取るといったケースが生じた。捻軍の反乱が生じ、北京、直隸省の安全が脅かされると、清朝は1862年に禁旅八旗の各営より精鋭な兵を引き抜いて**神機營**を新設し、西洋式訓練を施した。北京朝廷直属の武力として、当初1万人であった神機營は増員の結果、2万名近くまでになり、のちには北清事変で8ヶ国連合軍と戦うことになる。

② 緑營（緑旗）

兵力約60万人とされ、旧明朝の遺兵を整理再編したもので、各省の督撫（総督、巡撫）が指揮をとった。もともと軍隊というよりも警察的な性格が強く、地域の治安維持を任務としていた。漢人軍隊の強大化を恐れる清朝は、緑營を各府州県、城市郷村に警察の屯所のような形で極度に分散して配置し、それを全国の要点に集中配備された駐防八旗が監視統制する形をとった。指揮系統も細分化され、大軍を集中させることが難しく、合同演習を行うことも不可能であった。ただし三藩の乱（1673-81年）から軍事的任務に起用されるようになり、以後、実践において八旗に代わる清朝の基幹戦力となった。他方、八旗はそれによって自らの消耗を極力避け、兵力の温存をはかった。しかし緑營の警察隊としての基本的性質はその後も維持された。なお緑營では將校が兵隊に支給される給米の上前をはね、実在しない旧兵（退役兵など）を兵丁冊籍から削除せずにその銀両を着服するなどの因習があった。軍営中、定員の過半が幽霊兵で占められ、真の年籍の者が1人もいなかったという例さえあり、そうした場合、在营兵は実在しない旧兵の姓名を名乗らされていた。毎年春秋の定期的な査察は形骸化し、定員を満たすために替え玉兵士、とき

には路傍の人を駆り集めてその場しのぎを行った。そうした背景には上官の欲得だけでなく行財政の構造的問題もあり、緑営の運営に必要な経常費を州県の官庁が支出しないため、各将官が兵隊の給米を差し引くことによってその埋め合わせをするといった事情もあった。しかしそうした因習が緑営の軍紀退廃をもたらした。また緑営兵は貨幣経済の発展による物価高騰で生活が苦しく、副業に浮身をやつし、訓練もままならない状態であった。さらに緑営は機械的に員数を揃えるだけで人材技量を問わなかったため、貧農だけでなく無頼、遊民などが数多く入り込んでいた。

以上のように緑営は軍隊として事実上、有名無実の存在になっていた。そこで清朝政府は自強政策の一環として、禁旅八旗に神機營を新設したように、緑営においても精兵を選抜して再訓練を施した練軍を組織した。まず1863年、直隸練軍の編成が始まり、1870年代には直隸総督・李鴻章の下で西洋式小銃の配備、洋式操練による強化がはかられた。直隸練軍の編成は全国的に知られるようになり、それを模倣して1865年から95年までの間に、浙江、湖南、福建、江蘇、広東、山西、山東、河南、甘肅などで、次々と練軍が組織され、戦略的要衝に配置された。しかしながら練軍は実効性のある軍隊とはなり得なかった。軍の編成は統一性を欠き、兵隊は他地域への遠征を嫌がり、洋式操法を部分的に導入してはいたものの、直隸練軍を除く大部分は旧式の刀矛、抬槍（大型の火縄銃）を武器としていた。上官による兵士の給米や銀兩の横領、兵隊の遊惰も相変わらずで、各省の武官の間では無能の兵を淘汰していくことに隠然たる抵抗があり、それが抜本的に実行されることはなかった。結局、練軍は後述する勇営の補助的役割の域を出ない存在であった。

③ 勇営（防軍）

勇軍、勇兵など様々な言い方があるが、本稿では勇営の名称で統一する。かねてから清国には郷土自衛の組織として、団練（武装自警団）、郷勇（団練の構成員、土着の義勇兵。勇営と同義語として用いられることもある）があり、内乱または外敵にあたってその時々に応じて集められていた。太平天国の乱（1851-64年）という未曾有の危機にあたって、清朝の正規軍である八旗、緑営はこれを鎮圧することができず、それに代わって郷紳が郷土防衛の義勇軍、傭兵隊である勇営を組織するようになった。代表的なのは、曾国藩の湘軍（湘勇）、李鴻章の淮軍（淮勇）、左宗棠の楚軍（楚勇）である。これは従来の団練や郷勇を糾合し、同郷の地縁・血縁関係で結ばれた集団を核とし、農村の潜在・顕在の失業者を金銭で集め、部隊に編成した軍隊であった。団練は郷土の防衛を行うだけであるが、勇営は各地を転戦することに大きな違いがあった。北京政府はそれらの軍隊を清朝軍として公認し、諸乱を平定した後、勇営の多くは戦略上の要地に駐留し、その地の防衛に任ずるいわゆる防軍に再編された。

とくに勇営の代表格である李鴻章の淮軍は、李の出身地である安徽省の土豪的・宗族的団練を基幹として構成されたが、彼が江蘇巡撫時代に押さえることに成功した上海、江南デルタ地帯の官紳との結びつきがもたらす豊かな財源をもとに、西洋式小銃と大砲を中心とする装備訓練の改

革をもっとも進め、太平天国の乱と捻軍の乱を鎮圧する主力となり、清朝を支える最強の軍隊となった。それとともに李鴻章は、直隸総督兼北洋通商大臣に任命され、清末最大の實力者となり、やがて北洋艦隊を建設する。壬午軍乱、甲申政変に出勤し、日清戦争を戦った主力も彼の私兵の性格の濃厚な淮軍、および北洋艦隊であり、この戦いの内実が「日李戦争」であったかもしれないといわれる所以である。淮軍は同郷の関係が絡み合うだけに団結という点では強みをもっていたが、そうした前近代的な紐帯は平時においては逆に軍紀弛緩の要因ともなった。傭兵として応じた農民は給料の一部を上官からかすめ取られ、最後は裸同然での現地除隊か、せいぜいのところ4ヶ月分の涙金で追い返されたという。彼らから搾り上げられた金は軍幹部の家産を増やし、兵士たちは故郷の家族を養うどころか、自分が行きっていくのがやっという境遇に追い詰められた。八旗や綠營では略奪や暴行が絶えなかったが、勇營も同様で、他地域に行くと民間への略奪行為によって治安を乱し、地元の団練や住民と衝突した。

上海・南京間の偵察

以上のような清国陸軍の概要をふまえた上で、まず第1の局面として上海—南京間の偵察を見ていくことにする。上海の呉淞口に船が入ってまず杉山と福島が目にしたのは左岸の砲台である。砲台は正面に11門、北面に4門、合計15門の巨砲を備え、砲台外面は黒色に塗装され、遠望すると鉄板の被覆かと疑うようなものであった。ただし砲台内の状況はすでに別の将校が詳しく報告済みであったため、2人の記述も簡単なものにとどまっている。

しかしそのあとも軍事関連施設は漏らさず注意された。船が上海市内を流れる黄浦江に入ると、彼らは陸軍将校とはいえ艦船の知識も一通り持ち合わせており、黄浦江の口内に停泊する軍艦4隻のうち1隻は昨年横浜に来た旗艦・馭遠、残りは形質が等しく近年イギリスで造られた龍驤、虎威、飛霆、策電のうち3隻であるとすぐに判断した。そのほかに木造の古い砲船があったが、滑腔砲〔砲身の内側に旋条がない砲〕4門を搭載していることが認められた⁽²⁴⁾。さらに黄浦江を市街地に向けて遡ると、軍艦2隻、および修理中の艦船2隻があり、後者は靖遠、海安で、靖遠はヴァッシュール砲5門（うち1門は大きく17センチ）を搭載しているが、艦体は木製で腐朽が甚だしく修理しても実用に適さないだろう、また海安は修理を加えることがしばしばであると観察する⁽²⁵⁾。

上海でとくに重要な見どころとなるのは江南製造局である。江南製造局は金陵機器局（南京）、天津機器局（天津）とならぶ清国屈指の三大軍需工場の一つであり、洋務運動の一環として李鴻章により1865年に操業を開始し、西洋人の監督の下、機械、大砲、砲弾、小火器、弾薬、火薬などの近代的兵器を製造していた。1878年に試射に成功した6インチ口径の新型60ポンド砲はその全過程を清国人の職工が製造し、西洋の大砲に匹敵するといわれ、80年に7インチ口径120ポンド砲、81年には7インチ口径150ポンド砲まで生産されるようになった。いずれも前装式で、旋条がなされ、鍛鉄で造られた砲身をもつアームストロング砲を基礎としており、それに合

わせた新しい砲弾工場も建設されていた。また同じく81年に電氣的に爆発させる水雷のための工場ができ上がり、翌82年には輸入ライフル銃のための新型弾薬、モーゼル式の弾薬筒の生産も開始した。江南製造局から配給された武器・弾薬の大部分は南洋大臣の管轄する艦船や部隊に送られ、83年の清仏戦争にも使用された⁽²⁶⁾。

杉山と福島は在上海日本領事館の呉碩・事務代理の紹介状をもって江南製造局を訪れた。局内の4つの工場を見学した2人は、船廠（ドック・軍艦用の機械を生産）でその工法を目の当たりにして「小器械ハ素ヨリ気罐ヲモ製造スルト云ヒ、其基摸甚盛大ナリキ」と驚いた。また砲廠では完成した120ポンド砲のアームストロング砲を実見したほか、そこに隣接して新築された別棟の内部で蒸気機関の基礎工事などが行われているのを見て「最モ壯觀ヲ極ム」と感銘を受けている。そのほかに銃廠ではレミントン銃が1日平均12挺つくられ、1挺あたり約12両で南京、天津に送られることを知った。弾子廠については、イギリスより輸入した軍艦用24トンのアームストロング砲弾が数百個、倉庫に貯蔵されており、これは13インチ（33cm）の鉄板を貫くもののだとしてやはり強い印象を受けている。それ以外に水雷と火薬を製造する支局が黄浦江のやや上流にあったが、これは外国人の見学が許されなかった⁽²⁷⁾。

しかし江南製造局は表向きとは裏腹に、さまざまな問題を抱えていた。質の面では、新しい大砲やレミントン銃といっても19世紀の急速な技術発展の中でそれらはすでに時代遅れとなっており、また量の面では、翌年にはじまる清仏戦争で清国軍の需要を満たすほどの生産力には至らなかった。費用の面からいうと、莫大な財源（主に海関の関税収入）をもちながら、国内の炭鉱業・鉄鋼業の未発達などにより海外から割高の原料・材料を輸入しなければならず、加えて外国人技術者への高額給料の支払いがその財政力を奪い取った。しかも製造局の当局者は湖南閩で固められ、総辦など幹部による縁故主義、恣意的な人事による人員過剰、購買手続きの不正、公金横領などによって、1880年代から90年代初めにかけて悪弊がもっとも広範にはびこっていた。また後述する南京の金陵機器局と同様に、地理上、外国海軍の攻撃や封鎖に弱いという戦略的な弱点をもっていた。もともと国内の反乱を鎮圧する部隊への供給を優先して建設されたため、対外戦への配慮が薄かったのである⁽²⁸⁾。こうした裏面について杉山と福島がどこまで認識していたかは定かではない。

上海から汽船に乗った2人は長江をさかのぼり、南京に向かった。船上とくに注目したのは右岸に見える十里山の砲台、兵營である。砲台は約9つあり、ここが長江の鎖鑰（外敵の侵入を防ぐ要所）であるので、まさしく「守備甚タ嚴ナリ」といった状況であった。ただし砲台は屋根で覆われているため、船上から識別するのは難しかった⁽²⁹⁾。

つづいて鎮江でいったん船を下りた2人はまず西側の銀台山、ついで東側の北固山に登った。大きな町に入ると、まず小高い丘に登って全体像をつかむというのが彼らのよく取る手法であった。鎮江はアヘン戦争の際イギリス軍が、太平天国の乱のとき太平軍が占領して糧米ルートを断ち、南京に圧力をかけた地であるだけに、防備が厳しく施されていることが感じられた。たとえ

ば内城の東隅に駐屯する八旗兵はいわれている1,000人より少ないが、長江に浮かぶ島・焦山、左岸の象山、右岸の都天廟に砲台が築かれ、勇営二営が分割して守備にあたり、上海からのぼってくる船舶はその3つの高台からの砲撃を免れない。「実ニ天険ノ要害ニシテ、金陵〔南京の古名〕ノ鎖鑰ハ鎮江ニアリ、鎮江ノ鎖鑰ハ焦山峽ニ在リト云フヘシ」というのである⁽³⁰⁾。

鎮江から再び乗船して南京に到着した杉山と福島は、まず初日に兵営を外から見て回った。事前に得ていた情報では、南京には勇営の新字軍6営、新湘軍2営、慶字軍12営、合計20営・1万人が駐屯しているはずであった。しかし実際に検分してみると、下関近傍に5営、雨花台に2営、朝暘門外に2営、上元県庁の側傍に1営、合計10営であり、予想の半分しかないことがわかった。滞在期間が短いため本当の総数を探知する時間がないが、駐防八旗を除いて6,000より少なからず、1万より多からずというのが2人のとりあえず得た概算であった⁽³¹⁾。

彼らにとって貴重であったのは、運河に近い兵営の練兵場で兵隊の操練を見たことである。兵士の数は約500名で、その4分の3は洋銃、4分の1は長鎗を所持しており、太鼓とラッパにしたがいながら三面の方陣をつくってその中に鎗隊が入り、適宜前方を押し開いて鎗隊が前進するというものであった。杉山、福島は「銃隊ノ蜜〔密〕集運動、進退能ク整頓セリ。蓋〔蓋〕シ清西折衷ノ操法ナリ」と評価している⁽³²⁾。

それ以外に南京で見落とせないのは金陵機器局であった。江南製造局と同様、洋務運動の一環として李鴻章が1865年に創立した金陵機器局は、1880年代の初めに大砲、水雷、外国式の小火器、マスケット銃、砲架、砲弾、雷管、ガトリング砲、ノルデンフェルト式1インチ4連装機砲を製造していた。製品は南洋、北洋の防衛軍および沿河の守備軍に供給されていたが、収入は少なく、生産は限られ、諸経費は江南製造局よりもはるかに高くつき、1879年に外国人教習が引き揚げたのち、時代遅れとなったマスケット銃とガトリング砲が同時に生産されていた。人件費と行政費の高さが生産資金を消耗させるという点も江南製造所と似ていた。ただし福島らの南京訪問後、火薬生産に力が入られるようになり、拡張充実された金陵火薬局が黒色火薬を淮軍と両江諸省の防衛軍に安定して供給できるようになった⁽³³⁾。

南京での2日目、杉山と福島は雨花台に上って市内を一望したあと、その麓にあった金陵機器局を訪ねた。彼らが紹介状もなくいきなり中に入ろうとするのを見て守衛が制止した。すると2人に付き添っていた保甲局の下級役人が「彼等局内ヲ見ルモ亦何ヲカ知ラン」（彼らは局内を見ても何もわからないだろう）と耳打ちしたため、守衛は一行が入構するのを認めた。このときただ耳打ちするだけでなく、同時に袖の下を使った可能性もあろう。同行の保甲局の役人は杉山、福島のいわば手下となっていたのだが、それについては次章で述べる。かくして難なく構内に入ると、工場全体では主として大砲、ついで弾丸、さらに機械の順で生産が行われていた。砲廠を回ってみると、ガトリング砲とミトラユース砲が多く、とくに李鴻章の要請によるミトラユース砲がしきりに製造されていた。そのほかに口径34センチのクルップ砲の「摸造」があったが、撃鉄の機関に少し折衷を加えており、「奇ナリト雖モ亦実用ニ適ス」、長江水師の砲船に使用する

ものだろうかとの印象を得た。またアームストロング砲もあったが、大口径のものは見当たらなかった。弾廠においては以上の大砲にあわせて大小の砲弾が製造されており、倉庫の中を見る限りではアームストロング、ガトリング、ミトラユース弾がもっとも多く、またアームストロング弾はおおむね12ポンド以下のものであった⁽³⁴⁾。

金陵機器局の見学を終えると、杉山と福島は南京城の中心であった宮殿跡（明故宮）周辺も見学している。南京城は明の初代皇帝・朱元璋が築いたもので、1644年の李自成の乱によって首都北京が陥落して明が滅んだのち、副都南京で明朝の官僚と皇族が明の再興をめざして南明政権を樹立した。しかし1645年に清の大軍の攻撃によって南京城は陥落する。2人はその史跡を歩きながら往時をしのいだ。とくに清軍が突入した西華門両傍の城壁の崩れ方がひどく、ひとしお感慨深いものがあった。「懐古ノ情自ラ惻然タリ。嗚呼、僅ニ一握ノ内城ニ籠リテ清国全州ノ大軍ニ抗シ、前後左右砲銃ノ縦射ヲ被ルト雖トモ敢テ降ラス、斃テ後ニ止ミタルハ実ニ壮ンタリト云フベシ」。最後まで抗戦した明朝遺臣の「斃れて後已む」の姿は見事だというのである⁽³⁵⁾。

以上、南京での偵察は実質わずか2日間で行われた。兵營の数をもとに八旗以外の兵力数を概算したこと、金陵機器局の内部を見学できたことが、杉山と福島にとって大きな収穫であったといえよう。3日目の朝、2人は運河から長江に至る通船を雇ったが、そのとき200人余りの勇營の砲兵がやはり運河を通過して帰營するのに出くわした。士官が点呼をとり、下士官が兵を率いて船を乗り降りする有様は「規律正肅、混雑ナシ。又以テ平日ノ軍紀ヲ想像スルニ足ル」ものであった⁽³⁶⁾。

長江河畔に設けられた待合所は雑踏をきわめ、アヘンの煙と臭いが鼻をついた。上海に下る汽船に乗り込んだ2人は出航後、右岸の烏龍山の下に、往路は夜間のため見えなかった半角面堡の砲台2基を確認した。彼らは双眼鏡を所持していたから、それで確かめたのであろう。屋根で覆われているため種類は定かではないが、砲台の1つは砲8門、もう1つは6門を備えていた。またこの烏龍山の上と、相対する左岸にそれぞれ兵營が築かれていることも視認できた。彼らのもつ情報では兵營は4つのはずであったが、それが半減しており、烏龍山が鎮江方面から南京に上ってくる敵を阻止する第一の要衝であるだけにこの点が不可解であった⁽³⁷⁾。

煙台・天津間の偵察

つづいて第2の局面、煙台—天津間の偵察を見ていくことにする。上海から汽船で煙台に移動した杉山少佐と福島中尉は、すでに述べたようにそれまで空白であった区間の地図作製に加えて、軍事状況の調査を進めていった。

あらかじめ述べておくと、彼らは清国人を偽装して同地域に潜入したというわけではなかった。たえず護照（旅行許可証）を持ち歩き、必要なときにはそれを地方官吏に提示しており、外見からいって周囲の者から外国人であることは明らかであった。そのため臨淄県城を訪れたときは、異国人を珍しがる多数の人々によって取り囲まれ、「頗ル煩ヲ極ム」といった状況に陥った⁽³⁸⁾。

まず煙台の防備体制の調査について見てみたい。交通の盛んな芝罘（煙台）港には汽船、軍艦17, 8隻、民間船約100隻が碇泊しており、イギリス艦隊と清国北洋水師のスループ威遠の姿もあった。上陸すると海防練軍の兵営があり、約500の兵が駐屯しているほか、西側の西江山にも海防練軍の兵が分遣され、砲台（砲門約10）を守備していた。しかし杉山、福島が観察したところ、砲台は海港の後端にあるため、港内を制することは可能であっても、港口を制御して上陸する敵兵を防ぐことが難しいことがわかった。また近隣に金狗塞という戸数40～50の村落があり、さらにその近くに東門という眼下に煙台市街を眺めることができる場所があって、2人はここが「攻守必争ノ要地」であるとし、もし敵が金狗塞を根拠地にすれば煙台を一日でも支えることができなだらうと結論づけた⁽³⁹⁾。

このように彼らの偵察旅行はつねに戦争を想定したものであった。2人は煙台市内で海防練軍が隊列を組んで行進している様も見ている。写真3に見るように、それは砲兵・砲車（各砲5名）・令旗を翻す営官馬・楽隊（約20名）・鎗隊（約20名）・歩兵8小隊（1小隊20-40名）・鎗隊の順で進み、合計420-30名の人数であった。楽隊はイギリス式の太鼓とラッパ、鎗隊は長さ3間（5.45 m）の長鎗、歩兵は銃剣付き野戦銃をもち、イギリス式の操法を基本としてそこに清国の旧式を折衷したものであることが見て取れた。大砲は紅ラシャで覆われていたため、その性質を見極めることはできなかったが、砲車その他の形状はフランスの四斤山砲に似ていた。兵の制服は鶯色の絨緞（厚い毛織物）に黒絨の縁を付し、胸に「新軍」、背中に「山東海防練軍」の文字を記していた。

また煙台を出発して登州府に行く間に、崗崙村の近郊で道路の修繕を行う勇営の兵士たちにも遭遇した。しかしその態度は悪くなく、「数十群ヲ為シ、路傍ニ蟻集スト雖トモ、毫モ例ノ罵詈軽侮ノ状ナク、唯々道ヲ譲リテ通行ヲ妨ケサリシ」というものだった⁽⁴⁰⁾。

登州府は府庁、蓬萊県庁、登州鎮標衙門がある大きな町で、陸海の軍隊が駐屯して



写真3 山東海防練軍の隊列（『支那沿岸紀行』第2編、1882年10月20日）

いた。水城の中に緑營1營があり、表向きは水師であったが、軍艦をもたず、事実上の陸兵であった。その東辺海浜に練兵場があったが、杉山、福島は運よく総兵官（地方軍を総轄する武官）の検閲日にぶつかり、水師兵の操練をひそかに観察することができた。その内容は1營（1大隊）を4小隊に分け、さらに1小隊を2つの半小隊（24人程度）にし、全体を営官が、小隊を小隊長が指揮するというものであった。「大隊ノ柔軟演習ヲ見ルニ、進退挙動一体ノ如ク、本邦ノ兵ト大差ナシ」で、わずかに運動を間違える者には士官、下士官が「直ニ鞭撻シテ之ヲ懲」した。その操法はイギリス式に似ており、ラッパの響きが演習の終わりを告げると、3隊は右に分かれて2列横隊となり、他の1隊は左で又銃の形をとり、そこから銃をとってまた2列横隊となり、前者と相対して肩銃の姿勢をとった。鼓手、ラッパ手、銃隊が右側につき、整列が終了すると、馬にまたがった総兵官が中央を過ぎ、兵は捧げ銃をもって応える。しかし総兵官は答礼をなさず、紅色の営旗を翻し、従者に長柄の傘を捧げさせながら意気揚々と退出した。これは2人からすると「未タ全ク古風ヲ脱セサルナリ」との感を免れなかった。総兵官が去ると、兵はすべて側面縦隊となり、銃隊を前にして隊列を乱さず水城に入っていった⁽⁴¹⁾。全体から受けた印象は、秩序正しく、正確に運動しているというものであったといえよう。

登州府について止宿した龍口港では、その「形勢ヲ実査スル」のが任務であった。龍口は人家がわずかに200-300戸であったが、400-500人搭乗可能の清国船が数十隻繫泊する港であることから、水深はさほど浅くなく、近くの島には汽船の碇泊も可能であることが想定できた。ただし暴風を遮る地物が乏しいため、「良港ト称スルニ足ラス」、しかし「山東北岸芝罘以西ノ良港ナリ」というのが2人の評定であった⁽⁴²⁾。煙台（芝罘）とともに、戦時の上陸地点を想定した実査であったのだろう。

つづいて萊州府は軍隊の駐屯はないものの、済南の東門にあたり、やはり要所として見逃すことのできない町であった。府城を見て回った杉山と福島は、城が谷間に位置しているため、攻者に利あり、守者に害ありと結論づけている。また掖水（現在の南陽河）の左岸にある福路山に登り、府城を一望することも怠らなかつた⁽⁴³⁾。次の濰県でも県城を探查し、城壁の建築が甚だ堅牢であることを確認している⁽⁴⁴⁾。

青州府では表向き名勝を回るとの名目で案内者を雇って市内を巡ったが、重点箇所はやはり城郭であった。青州府城の城壁は外面を煉瓦で覆っており、その質は非常によく、壊れたところもない大変堅牢なものであった。城内に兵は駐屯しておらず、門外から西北1kmに北城があり、そこに副都統を置き、駐防八旗1,800余名が駐屯していた⁽⁴⁵⁾。また樂安県城を訪れた際には、西門の側傍から城壁に登り、歩測によって東西約800m、南北約1,000mであることを知り、壁がほとんど直立しているので門の傍ら以外から上ることは不可能であることを確認した。壁の外側には修復が加えられていたが、内側は被覆の煉瓦がことごとく崩れ落ち、「崩敗既ニ極マリ」という状態であった⁽⁴⁶⁾。さらに蒲台城の訪問時も、双眼鏡を携えて南門の側傍から城壁に登って歩測を行い、壁にある胸牆（敵弾を防ぐため胸の高さに築いた防御壁）が非常に簡略なもので

あることを確かめた。また同地北端の黄河に面したところに蒲関練軍 200 人が駐屯して渡し場を準備していることも視認した⁽⁴⁷⁾。いずれも攻城戦を想定しての視察であったことがわかる。写真 4 はその周辺の風景を描いたスケッチである。

黄河を越えた 2 人は雙眼井なる村に着き、そこから洪水の惨状を目のあたりにしながら旅を進める。ラバが泥にはまって軸子が横転したため福島が転落するというエピソードもあった。しかしそれを見た土地の人々は「集観シテ快ト為シ、一人ノ来リ助クル者ナシ」といった有様であった⁽⁴⁸⁾。そこから先の塩山県城は壁が崩れ、すっかり衰退しており、城内も人氣が乏しかった。滄州も以前は駐防八旗が置かれていたが、城壁は壊れ、兵の駐屯はなかった⁽⁴⁹⁾。

しかし滄州からさらに進んで興済にいたると、遠目から見れば城郭かと思間違えるような勇営の兵營が 13 も林立していた。ここは渤海湾に面した大沽が攻撃されたときに対応する後背拠点であり、兵營には土塁がめぐらされ、所々に哨所があって歩哨が常駐していた。杉山と福島は 13 営中の 1 営の中で密集運動が行われているさま、営外の射的場で訓練がなされている様子を遠くから観察している。射的場の的は鉄製の長方形で、上下に 3 つの円形黒点が画かれており、命中すると声があがって、鼓が打たれ、旗が振られた。もっとも遠い的標は約 1,500 m あったが、実際に行われていたのは 100 m の近距離であり、それにもかかわらず、命中する者は大変まれであったという。遠望のため銃の種類はわからなかったが、みな銃口から弾を装填する旧式のものであった。ちなみに射的場から北に向かう道路は兵士たちが新たに作ったもので、横幅 10 m、両側に広さ 4 m、深さ 90 cm ほどの濠を備え、その「規模壮大、未タ清国ニ見サル所ノ者〔物〕」であった⁽⁵⁰⁾。

天津に入った杉山と福島は軍事偵察、地図作製は行っていない。すでに他の情報将校が記した

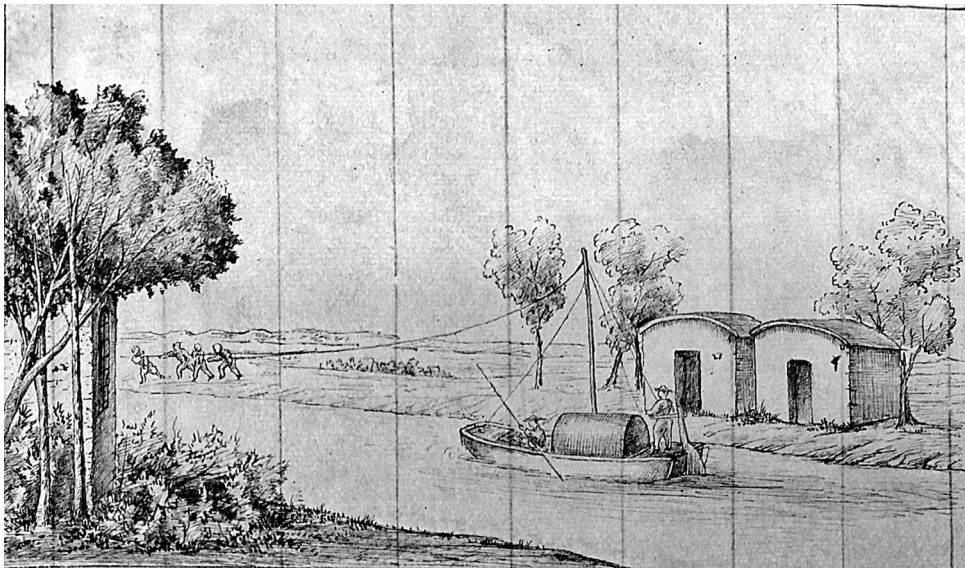


写真 4 「黄河下流ヨリ船ヲ曳ヒテ蒲関ニ至ルノ図」（『支那沿岸紀行』第 2 編，1882 年 11 月 6 日）

紀行地誌、管西局の地図があったからである。それ以外に天津で見落とすことができないのは江南製造局について清国第二の規模をもつ天津機器局であった。1867年に設立された天津機器局は、賈家沽道の東局と海光寺の西局があり、東局の方が規模と重要性において西局よりはるかに勝っていた。東局は火薬製造工場、硝酸・硫酸処理施設、雷管製造機、木工動力機、金属工作機械を完備する一方、西局は規模が小さく、鑄鉄工場と大砲鑄造工場から成っていた。天津機器局は李鴻章の指導下に火薬と弾薬の生産に重点を置き、1875年にいたってその生産量はまったく見事なものとなり、火薬、雷管、小火器用弾薬、砲弾、水雷などを製造し、それらの軍需品は北洋の海防貯蔵庫、直隸や山東に駐屯する淮軍、練軍の部隊、防衛のため他省に移動させられた軍隊、熱河、チャハル（察哈爾）、奉天、吉林、黒竜江の諸省へ絶えず配給された。人件費は増大しつづけたが、1876年から79年にいたるまで現存する収入と技術的な状況の割に、総力を尽くして生産を行い、1880年以後、李鴻章はさらに生産の拡大と収入の増大、技術の改善を試み、81年から82年にかけては辺境防衛のための軍需生産を支援していた⁽⁵¹⁾。

天津機器局は西局よりも東局の方が重要であることを杉山と福島は知っていたと考えられ、天津に入ったとき夕方にさしかかろうとしていたこともあろうが、西局の北側を素通りして、そのまま中心地に入っている⁽⁵²⁾。しかし東局については天津入りした翌日、日本領事館で島村久副領事に見学の照会を依頼した。ところがさらにその翌日、当局から見学は認められない旨を示唆する回答を受け取った。そこには「機器製造各局ハ中国官員等ト雖モ故無クシテ前往觀看スルヲ得ズ」とあった。杉山と福島は「陽ニハ謝絶ノ言語ヲ以テセサルモ、陰ニハ言ヲ設ケテ忌避スル者ノ如クシテ、遂ニ果サス」と記している⁽⁵³⁾。

天津で2人は前北京公使館付武官で日本への帰国途上にあつた梶山鼎少佐が天津に到着予定と聞いて、「諸事ヲ談合」するため同地での滞在を延長し、梶山少佐が到着すると「諸事ヲ規定」し終えた⁽⁵⁴⁾。このとき3人の間で情報に関する意見交換がなされるとともに、北京に留まることになる福島と梶山とで引き継ぎが行われたと推察される。会談後、杉山と福島は北京に向けて出立し、同地の日本公使館に入り、2名共同の偵察旅行は終了した。

南清沿岸の偵察

その後、杉山少佐のみ天津、煙台経由で南清地域の沿岸を視察するが、それについて簡単に述べておくと、その目的もやはり砲台、兵営を中心とした清国の防備施設の検分であった。

上海から寧波に渡航した杉山は、寧波の甬江に入るとすぐに砲台を観察し、3ヶ所の砲台が敵艦に十字砲火を浴びせられるようになっている点に注目している。杉山の特徴は現場を見ながら実戦のシミュレーションを試みることで、寧波では攻撃側がまず舟浜島を攻略し、表向きは甬江口を攻撃したのち、対岸渡舟に便利な地点を探し、金鷄砲台の側面および背後を襲撃すれば、この天然の要害は抜き難いものではないとしている。また甬江をさかのぼった寧波の波止場に砲艦の恵済と元凱が碇泊していることも確認した。上陸後、府城で歩測を行いながら城壁の具合を確

かめ、練軍の練兵場を見学するなど、その行動パターンはそれまでと同様である⁽⁵⁵⁾。

福州では海岸から市街地に向かう閩江上の砲台とその数を船上からチェックして攻撃側から見た第1、第2、第3関門を把握した上で、馬尾港の福州船政局を観察するためその周辺を小舟で回っている。この福州船政局は、江南製造局、金陵機器局、天津機器局とならんで洋務運動の成果を示すものであり、清国屈指の造船所として知られていた。さらに杉山は上陸して府城を中心とする地形をおさえ、「当城ヲ襲撃スルニハ南面ヨリ難クシテ東北及西面ヨリ易シトス」との結論を引き出している⁽⁵⁶⁾。この馬尾港はそれから1年8ヶ月後、清仏戦争の馬江海戦の舞台となり、福州船政局、福建水師と諸砲台はフランス極東艦隊によって壊滅することになる。

次に汕頭では、市街東方の突出部に砲台（砲数15）があり、新築かつ堅牢な円形閉鎖砲台であることを視認した⁽⁵⁷⁾。香港では北岸の砲台3、南岸（香港島）の砲台2が海峡の東口と西口を制する形になっていることを確かめ、各砲台が簡単な構造で数も少ないのは、香港防御のメインは水雷であって、砲台はこの水雷を守るために設けてあるからだろうと推測している⁽⁵⁸⁾。

最後に広州の砲台偵察はもっとも入念に行われた。虎門砲台3ヶ所のうち虎門と横当は改築され、「基模広大ニシテ頗ル堅牢」であり、両所に勇營の兵營が設けられていた。さらに杉山は三浦自孝中尉、杉島〔名前不詳〕中尉とともに小舟で盤石島に渡り、同島にある4つの砲台を直接探査している。第1に保安砲台は砲門8、大砲は清国製で口径約8センチ、砲台内に哨舎があり勇營の番卒10余名が配置され、指揮官室内にはゲバール銃8挺が並んでいるのを見た。第2に鎮南砲台は砲門20、花崗岩を積み重ねた上に土塁を設け、甚だ堅牢であるが、その中に入ることはできなかった。しかしあとで永固砲台の衛兵に聞いたところ、そこと同型の20センチのクルップ砲を用いていることがわかった。第3に綏定砲台は正面に砲門8、両側に18、旧式の円形砲台の前面に新式の半円形を増築し、聞けば砲門の周囲に鉄板を挿入してあるということであった。砲台内に兵營あり、100余名が駐屯していた。第4に永固砲台は砲門5、外面が少し荒れていたが、内部は「頗ル清潔ニシテ且整頓セリ」という状況であった⁽⁵⁹⁾。このように杉山は遠目で砲台を眺めるだけでなく、そこを直接訪れ、保安砲台にいたっては内部の指揮官室まで覗き込んでいる。清仏戦争前の当時、清国軍側の警戒がいかに手薄であったかがうかがえる。

以上、本章では福島の内モンゴル旅行、杉山と福島による①上海—南京、②煙台—天津、および③杉山単独による南清沿岸地域の偵察旅行をたどった。そこでいえるのは、第1に彼らの目的が測量と地図作製だけでなく、全体を通じて対清戦争を想定した兵要地誌調査にあったということである。2人は限られた短い日数の中で精力的に動き回り、各地の港湾、兵營、砲台、城郭の状態をチェックし、すでに得ていた情報との照合も行いながら、その状況を記録している。単に機械的に見て回るのではなく、実戦を想定しての観察であって、煙台と龍口港は上陸地点として考慮され、前者は港内を見下ろす金狗塞と東門を占領することが肝要であり、後者は不足点をもつがそれなりの良港であるとされた。杉山はこのシミュレーションが得意であったようで、寧波

や福州でもその攻略方法を思案している。また兵士の隊列や操練、射撃訓練を見たことは、清国兵の実力をさぐる2人にとって重要な手がかりになったと考えられる。さらに陸戦、攻城戦を考えて主要な城郭はかならず視察の対象となり、歩測によってその規模を測定したほか、とくに外壁の強度がチェックされた。いずれもその地に腰を落ち着けた定点観測ではないため、必ずしも精密な観察ではなかったが、ルート上の清国軍の防備体制は概括的にほぼ把握されたといえよう。

第2に江南製造局、金陵機器局の2つを見学し、その内部に入って生産状況を目撃したことがある。これによって生産規模がどの程度のものか、いかなる武器の生産に重点が置かれているかという点が具体的に捕捉された。天津機器局東局の見学がかなわなかったことは2人にとって失敗であり、清国側にとっては成功であったといえる。天津機器局東局は火薬と弾薬の生産に力点を置き、清国軍に広範囲に供給を行っていたため、その軍事力を測る上で重要な見どころであった。その視察が実現しなかったことは彼らの偵察旅行の中で最大の痛手であったといえるだろう。ここを視察すれば清の三大軍需工場のいずれも押さえたことになるので、彼らに大きな自信を与えていたはずである。ただしそのような点があったにしても、彼らは所期の目的をおおむね果たしたといえるであろう。

第3に彼らのものを見る姿勢であるが、主観的な感情を抑制し、事実をありのままに捉えるよう心がけながら記録を行っている様子がうかがえる。しいて思い入れが見られる箇所をあげるとすれば、南京城西華門の城壁を見て明朝遺臣の最後に思いをいたし、「斃れて後已む」という日本の価値観から感慨を催したところくらいのものであろう。

第4に、これは第3と重なることであるが、軍事関連の視察において、当時の日本人に通有であった近代化に乗り遅れがちな清国人に対する侮蔑心が見られないことである。むしろすでに見たように、江南製造局を見学した際には、船廠の「基摸甚盛大ナリキ」とし、蒸気機関の基礎工事は「最モ壯觀ヲ極ム」としている。上海から鎮江に向かう途中の十里山砲台の守備は「甚タ嚴」であり、鎮江の砲台も3ヶ所から攻め手を挟撃できる「実ニ天險ノ要害」であると見られた。南京で目撃した兵隊の操練、密集運動は「能ク整頓」されており、金陵機器局で見たクルップ砲は「摸造」とはいえ「亦実用ニ適ス」ものと判断された。南京を去るとき、運河の乗船場で遭遇した200人余りの勇営の砲兵は「規律正肅、混雑ナシ。又以テ平日ノ軍紀ヲ想像スルニ足ル」ものであった。登州府の緑営兵の操練は「進退挙動一体ノ如ク、本邦ノ兵ト大差ナシ」とされた。広州で杉山が見た虎門砲台は「基模広大ニシテ頗ル堅牢」であり、永固砲台の内部は「頗ル清潔ニシテ且整頓セリ」といった状況であった。そこには清国の軍兵を不当に侮るような偏見は見られない。杉山と福島は先にあげた「清国派出将校心得」「清国派出将校兵略上偵察心得」に示された参謀本部の方針、すなわち先入観や憶測、偏見を排除して虚心に清国の状況を観察せよ、いかなるものにも一長一短があるのだから、彼の短を拾うよりも彼の長に着目せよという命題を忠実に実行していたことがわかる。

ちなみにイメージ論、対外認識論の観点からいうと、当時の日本人の中国認識には、中国古典

を通じて長年にわたって形成されてきた中国への敬意、ならびに旧習に固執して自己改革が容易に進まない中国に対する侮蔑感というアンビバレントな感情が併存していた。どの研究者も表現に若干の違いがあるにせよ、「固陋の国という軽侮の感情」と「古代聖人の母国という畏敬の感情」⁽⁶⁰⁾、「同時代の中国への否定観」と「古典世界の中国への肯定観」⁽⁶¹⁾、「蔑視の対象」と「規範の鑑」⁽⁶²⁾といった日本人の対中イメージの二面性を指摘している。また外交論の観点からいうと、明治維新後から1884年までの間、藩閥勢力、民間ともに日本が東アジアの中で早くから近代化に着手したことに対する優越意識を定着させ、壬午軍乱の頃から清国の軍勢力が強化され、日本に拮抗する程度になるが、日本は制度の近代化や国民精神の面で自信をもっており、清国に対し軍勢力を中心とした近代化の面でも依然として優越意識を有していた⁽⁶³⁾。杉山と福島が日本人全般に流れるそうしたアンビバレンスや優越意識から超越していたとはいえないであろう。明朝遺臣の最後に敬意を払うのは古典的世界の中国への敬意の表れであるともいえようし、後述するように在北京公使館付武官時代の福島は管西局員の杉山にあてた信書の中で、清国人を「豚尾」「豚児」と侮蔑的に呼ぶことがあった。福島が躊躇なくそうした語を用いるということは、それを受け取る杉山の側にも同じような感情が共有されていたと見てよいだろう⁽⁶⁴⁾。

ただしここで問題となるのは、そうした心情が情報活動にどの程度まで影響を及ぼし、その足枷となっていたかどうかという点である。再言すれば、杉山と福島の報告書には清国軍を甘く見ているようなところはなく、かといってそれを誇大に恐れることもなく、むしろその有様を客観的、冷静に眺めていた。本章を終えるにあたって、その点を押さえておきたい。

2 清国社会の実態観察

前章では杉山、福島が調査旅行を通じて清国の軍事関連施設をいかに観察していたかという点を中心に検証を行った。しかしながらどこの国でもそうであるが、軍隊を底辺から支えるのは結局その社会であり、構成員である大衆である。つまりモノではなくヒトということになる。杉山、福島は清の社会と人々をどのように観察していたのであろうか。本章ではこの点を見てみたい。

彼らが上海に着いてまず感じたことは街の不衛生であった。市街の西南部・上海县城（滬城）に入った2人は次のような風景を見た。「城内人烟稠密，街路狭隘，糞汁瀦流シ，臭気鼻ヲ衝キ，壁外濠ヲ繞ラシ江水ヲ引ク。濠中汚穢ヲ投シ，犬猫ノ死体亦タ水上ニ浮フ。其不潔名状スヘカラス。然ルニ桶ヲ担荷スル者，汚物間ノ水ヲ汲テ陸続城内ニ入ル。聞ク飲用ニ供スルカ為ナリト。驚歎ニ堪ヘサルナリ⁽⁶⁵⁾」。これによると、城内は人々で隙間なく込み合っている。街路は狭く、路上には糞尿が水たまりをつくって流れ、臭気が鼻を衝く。城壁の外に濠をめぐらし、川の水を引いているが、その中に汚穢（汚れているもの、または糞尿）を投じ、犬や猫の死骸が水面に浮いている。その不潔は言葉で表現し難い。ところが桶をかついだ者がこの汚物間の水を汲んで、次々と城内に入っていく。聞いたところでは飲用に供するためという。驚嘆に堪えないというの

である。2人が見たところ、そうした有様は多少の差はあっても上海だけではなかった。煙台では街が「甚タ整頓セス」、住民が居住するところは「街衢狹隘、最モ不潔ヲ極ム」といった状況で、出立時、「不潔雑踏の市街」を過ぎて郊外に出て、ようやく新鮮な空気を呼吸したという⁽⁶⁶⁾。

宿泊する旅店も毎回、不衛生であった。南京の宿は最初提示された料金を半額まで値切って泊まることになったが、その部屋は三面壁で、一方に小さな破窓があり、土間に踏台を置いてその上に木板を並べて寝台としていた。「四壁天井、大〔太〕古ノ塵ヲ積ミ、空気ノ揺動ニ從テ散落ス。殊ニ光線微ニシテ、昼猶ホ暗ク、恰モ獄舎ノ模様ヲ為セリ⁽⁶⁷⁾」。山東省登州府の旅館は、店内に馬糞が窓戸の半ばまで堆積していたため室内が暗く、「其不潔能ク筆紙ノ尽ス所ニ非ルナリ⁽⁶⁸⁾」といった有様であった。僻村である呈羔では農家が兼業で営んでいる宿に泊まったが、「土床、大〔太〕古ノ塵穢ヲ積ミ、床上数十年来ノ破蓆ヲ佈キ、戸口三尺ノ板戸一片ヲ附シ微カニ光線ヲ取ルノミ。臭氣鼻ヲ撞キ、不潔名状ニ堪ヘス」。そこでやむを得ず軸子を戸内に入れ、その中に身を入れて寝たほどであった⁽⁶⁹⁾。2人は町でも村でも毎日そうした旅店に泊まっており、西洋人が宿泊する煙台の「ビーチユ・ホテル」と天津のグループ・ホテルにおいてのみ快適な眠りにつくことができた。

次に感じたことは民衆の貧困である。煙台から天津に向かう途上で通過する村々はいずれも貧しい暮らしぶりを示していた。山間の寒村・朱劉店の民宿の場合、主人が外国からはるばるやって来た2人に惻隱の情を催し、夕食に黄米（もちアワ）の水飯（粥）を出してもてなしてくれた。しかしそれは日本では「乞丐〔乞食〕ノ徒モ之ヲ甘食セサル」ようなものであったという。旅を続けてこうした食事に慣れていた彼らは、そのような味でも可であるとしたが、その土地に住むほかの住民の状況も推測するに足りると記している。この旅店では夜に寒さがますます厳しくなり、持参の毛布2枚をもってしてもほとんど眠りにつくことができなかった⁽⁷⁰⁾。また同じく寒村の雙眼井の民宿では、主人が自分の居室を貸してくれ、主人自身は土の上にコウリヤンの茎を敷き、薄い蒲団をかけて寝ていた。しかし提供してもらった居室自体、2人からすれば「不潔モ亦甚シ」といった具合で、主人は雑穀の粉を湯に混ぜたような、あるいは蕎麦のようなものを食べ、「頗ル簡易ノ生活」をしていた⁽⁷¹⁾。

杉山と福島はそうした山東省の庶民たちを軽蔑したわけではない。2人に付きしたがった馬夫2名は、旅の初日こそ、約束の時間に大幅に遅れて颯感をかったが、その翌日には寒風の中、山坂を上下して歩き続け、「馬夫ノ健捷ナルモ亦賞スベシ」と感心された⁽⁷²⁾。また七十里舗という農村の人々については「質朴ニシテ能ク農ヲ勉ム」けれども「雑穀尚ホ口ヲ糊スルニ足ラス」として、むしろ同情的であり、「山東質直ノ氣風」を肯定的にとらえている⁽⁷³⁾。下魏家という村の民宿も農家が副業で営み「建築粗悪ニシテ不潔甚シ」であったが、食後に主人（または知り合った土地の住民）から子女が病気であるが薬に乏しいことを聞かされると、携帯していた家庭薬の千金丹を分け与えて慰めている⁽⁷⁴⁾。そのほかにも雙眼井を出て、洪水の惨状の中を小舟で進んだ彼らは、あたかも湖水の中に点々と浮かぶ島のようになってしまった諸集落をながめながら、

「到处如斯慘状ヲ極ムト雖トモ、一二地方官ノ保護アルコトナク、怙トシテ之ヲ顧ミサル者ノ如ク、実ニ慘中ノ慘ト云フヘシ」として罹災者に同情する反面、人々を救おうとしない地方官のあり方に疑問を呈している⁽⁷⁵⁾。洪水の爪痕を目の当たりにした2人がさらに歩を進めると、沿道でたまに通り過ぎる旅行者はおおむね鎗や刀を携えており、それは盗族から身を護るためであった。治安が悪く、当局の取り締まりが及ばないということで、「以テ地方ノ景勢ヲ想像スルニ足ル」と2人は書き留めている⁽⁷⁶⁾。

これまで見たように杉山と福島が接触した一般の清国人たちはいずれも貧しい者ばかりであった。一方、そうした中で彼らが閉口したのは、あくまで金銭を追求する人々である。南京に汽船が到着すると、そのまわりに運河を行き来する小舟が群がり集まり、我先にと乗客を求めて争った。そのすきをついて盗みを働く者がいるので2人は注意しつつ、とりあえず船代を要求額の半分まで下げることに成功して小舟に移乗した。しばらく運河を進み、舟を下りると、舟子が2人の袖にまとわりついて酒銭を請い、そこへ役夫が群がり集まり、荷物を運ぼうと争った。「頗ル雑沓、煩ニ堪ヘス」と2人は嘆いたが、旅先ではこうした修羅場がことあるごとに展開された。宿屋まで荷物を運んだ役夫が料金以外に酒銭を求めてまくしたて、与えないとその場を去ろうとしないため、「腕、為メニ震フコト屢々ナリシ」、すなわち腕力を用いざるを得なかった⁽⁷⁷⁾。

南京では外国人の宿泊を受けつける旅館がごくわずかしがなく、日本人がよく泊まる「万源」に止宿した。しかしそこは「人情礼義ヲ解セス、惟タ金銭ヲ貪ルヲ主義トス」る旅店であり、値引き交渉の結果、通されたのは「獄舎」のような部屋であった。この土地の決まりで、店の主人が2人の護照をもって役所に届け出ると、しばらくして保甲局より属吏2名が来て、杉山と福島の挙動を始終監視した。2人は南京市内を外国人が歩き回ることには不自由であると聞いていたため驚かず、清国人は「奪ヘトモ厭サルノ人情」であるとして試みにわずかばかりの貨幣を与えたところ、以後この保甲局の下僚2名は自分の任務をほとんど忘却し、聞かないのに言い、問わないのに答え、ただ杉山と福島の歓心のみを求めることに努めるようになった。つまり当局の監視者が賄賂によって逆に手下同然となったのである。「故ニ却テ便利ヲ得ルコト少ナカラス。亦タ与シ易キノミ」と2人は記している。保甲局の役人は「恰モ雇ヒタル嚮導ノ如ク」市内を案内し、杉山と福島は彼らによって「百般ノ便利ヲ得タ」。すでに紹介したように江南製造局に入れたのは、まさしくこの役人たちの迎合的助力のおかげであった。「惟タ金銭ヲ貪ルヲ主義トス」清国人に会うごとに彼らは辟易したが、場合によっては金によって転ばせ、諜報に役立てることができたわけである。2人が長江の乗船場から上海に向けて出航するとき下僚の1名が見送ったが、昼食代として洋銀1ドルを与えられた彼は「欣喜シテ去」っていった⁽⁷⁸⁾。

山東省の沙河駅では次のようなことがあった。前日から風雨がやまず、馬夫がしきりに宿屋に滞在することを望んだので、やむをえず晴れるのを待った。昼過ぎ、雨が収まったので、急ぎ出発しようとする、旅店主が法外な額を請求した。2人に付き添ってきた清国人の従者がその非を責めたが、店主は聞こうとしない。そこで福島が護照を取り出して、「汝の政府は私にこの書

を与えた。地方の人民で不法をなす者がいれば地方官に訴え、地方官は相当の処分を行い、外国人の通行を妨げないことを証するものだ。汝がいま 10 両を要するならばこれを与えよう。100 両を要するならばこれも与えよう。私はその当否を知らない、それを決めるのは地方官である。私は地方官に問うから、汝は受取証書を出すべきである」。この脅しに店主は「大ニ懼レ」、ひそかに従者に請い、相応の料金を受け取った。「是レ雨後ノ一興」にして、また「官吏ノ圧制ト人民ノ無学ヲ見ルノ一徴トス」と福島は報告書に記している⁽⁷⁹⁾。

宿泊代や食費をめぐる争うのはこの日だけでなく、毎朝毎昼つねにそうであった。店主はまず法外の値を要求するので、その対応は蘇州出身の唐という名の従者にまかせた。彼は少し英語を理解するので杉山と福島にとっては便利な存在であったが、清国北部の言語は十分理解できないため、山東省の住民との応答では非常に不便であったという。しかし店主と争うことが彼の「長技」(特技)であり、身体が肥大し、言葉遣いが荒くれており、年齢も年かさのため、「圧制頗ル行ハレ大ニ経済上ノ利益ヲ為シタリ」。相手に圧力をかけて言い負かすことができたというのである。口角泡を飛ばしてやり合うときに「慄悍」な者が勝ちを制するというわけで、旅行で従者を選ぶときはこのことを参考とすべしと 2 人は報告している⁽⁸⁰⁾。

ところがそれだけではすまないこともあった。山東省濰河で渡舟に乗ろうとしたとき、舟子が杉山、福島の周りに群がり集まって争った。2 人が料金を聞くと、やはり法外な値段を要求した。その不当を責めるや、舟子たちは「前後左右ニ群リ、罵詈百出、最モ無礼ヲ極ム」、そこで 2 人はピストルを抜いて「汝等無礼をなす、余これを試さん」と威嚇し、ようやく金額が定まり、対岸に渡ることができた⁽⁸¹⁾。寒村の雙眼井でも舟子があぶく銭を取ろうとしたため、護照を出して脅し、料金を下げさせた。しかし 2 人が宿泊していた旅店の主人が一行を延泊させてさらに宿代を取ろうと舟子と共謀し、翌朝の約束時間にわざと舟子が来なかったため、杉山と福島は出発できなくなってしまった。彼らの計略を見抜いたもののどうすることもできず、2 人は仕方なく「怒ヲ吞テ」延泊せざるを得なかった。ところが皮肉なことにその日は無類の好天気であり、2 人は旅店の庭前でピストルを試し撃ちして鬱憤を慰めた⁽⁸²⁾。

しかし悪いこともあれば良いこともあった。翌日出発する段になって旅店主がまたしても過剰な金額を請求してきたため、従者の唐がその不法を責め、両者は互いに争って屈せず、その騒ぎを聞いた村内の人々が集まって来た。村民は 10 有余名に達し、みな従者に味方して「喋々吩々」、激しく店主を詰った。この衆圧に押された店主は値段を下げ、黙ってしまい、問題は落ち着いた。「実ニ鬱後ノ一笑ニシテ、亦人情風俗ノ一班ヲ知ルニ足ル」と 2 人は記している⁽⁸³⁾。

以上のような体験をくり返すことによって、杉山と福島は彼らの言葉を用いていえば、不潔雑踏の市街、金銭を貪るを主義とする旅店主や舟子たち、すこぶる簡易の生活をしている質朴な農民たち、金でたちまち態度を翻す下役人、災害に苦しむ人々の保護を顧みない地方官、当局の取り締まりが及ばない地方、しかしそれでいて官吏を恐れる無学な人民といった清国社会の有様を心に刻んでいったと考えられる。煙台から 13 日をかけて譚家坊に到着したとき 2 人は、いまだ

に青州に達することができない、汽車であればわずか16, 7時間で行けるのにと嘆いている。「文化ノ深淺, 人民ノ福否, 懸隔モ亦甚シト云フヘシ⁽⁸⁴⁾」。近代化を進める日本とくらべて文化の深度, 人民の幸福度があまりにも違うというのが彼らの偽らざる実感であった。

このように杉山と福島は清国での経験を通じて「公共の福祉を考えず, 私益に走る官吏」と「それをいたずらに恐れる事大的な庶民」から成る「乱雑で無秩序な社会」という清国認識を深めていった。そして, こうした社会の上に成り立っている清国軍隊は, たとえ堅牢な砲台, 近代的な軍需工場と兵器をもっている, 果たしてそれをきちんと運用できるであろうかという疑問を抱いたはずである。杉山と福島が蒲台城での滞在を終え, 黄河を越えようとした際, 渡し場は土地の住民でごったがえしていた。このときそこを守備する蒲関練軍の兵1名がやって来たので, 2人は日本の錦画2, 3枚と巻煙草を与えた。周りにいた群衆がその兵士にからみついてその半分を奪い取ってしまったものの, この賄賂は効果きめんで兵隊は意外な贈り物に喜び, 2人が雇っていた馬夫を手助けしたほか, 渡し舟の周旋まで行った。もって「軍紀ノ如何亦想像スルニ足ル」と2人は記している⁽⁸⁵⁾。この兵士も杉山と福島が考える清国社会の体現者であった。

上記のように杉山と福島は賄賂の一種として現金だけでなく, 錦画を用意していた。清国には日本の錦絵のような細密美麗な木版画がなく, ことに汽車が轟走し, 桜花が燦爛たる絵などはみな喜んで賞玩するのだという。それが欲しいために自ら情報提供をしに来る者も現れた。その情報とは寒村である水落坡の戸数, 人口, 錢舗(金融機関), 良田, 牛, ロバ, ラバの数を示すものであったが, 同村の人口を「民人万口」としており, 「実ニ抱腹ニ堪ヘタリ」と杉山と福島は笑わざるを得なかった。「土人ノ言フ所ロスノ如ク信用シ難キコト常ニ多シ」というのである⁽⁸⁶⁾。

清国での滞在が長くなるほど, 清国軍の軍紀が弛緩していることが明らかになっていった。南清旅行の際, 寧波で練軍の大教場(練兵場)を見学した杉山は, それが大教場といいながら東西220-230メートル, 南北200メートル程度の小さなものであり, しかも場内いぢめに米と麦が干してあるのを見た。つまりそこは練兵場でありながら農家の乾燥場を兼ねていたのである⁽⁸⁷⁾。当時の清国では当然といってよいごくありふれた風景にすぎなかったが, 杉山は日本ではあり得ないと思ったであろうことは容易に想像がつく。杉山と福島は軍事面についてはあくまで客観的な報告書を作成することに専念し, 個人的な感情を示すことはほとんどなかったが, 心の中では清国軍隊もその社会を反映して決して精強でシステムティックなものではないと感じていたであろう。その点は調査旅行を終え, 北京に残留することになった福島の残した記録を見ればより一層明らかとなる。

以上, 本章では杉山と福島が清国の社会と人々をどのように観察していたかという点を検証した。彼らは清国旅行を通じて, 生活するのに手一杯で教育に無縁の農民たち, 利益を追い求めることに性急な商売人たちに接するとともに, 官民間の懸隔や分裂をかいま見ることにより, 同国の国情が近代的な国民軍を組織, 運営するのにうまく適合しないであろうことを感じ取った。若き日の福島にとって, このように清国を自らの肌でじかに感じ取る日々をくり返したということ

は、非常に重要な経験であったと考えられる。それは書物を読んだだけではわからない生の清国および清国人の姿に迫るということであった。そうしたフィールドワークの体験は彼をして机上の空論から遠ざけ、あくまで現場での実地調査を重んじる次の段階へと進ませることになる。偵察旅行を終えた福島は北京においてその情報活動をいかに深化させていったのであろうか。次章ではその点を考察してみたい。

3 清国軍の全体像把握

前章で見たように2ヶ月弱にわたる沿岸旅行を終えた福島は、1882（明治15）年11月22日、北京に入った。以後、1884（明治17）年10月5日に同地を出発するまでの約2年間、北京に滞留することになる。北京での福島は仕事に熱中し、妻に「此頃ニテハ一層勉強、常ニ一昼夜二十四時間ニテハ事不足、百時間ヲモホシキ思ヲ致居候」、午後やや疲れると1時間ほど馬に乗って北京城外に出、新鮮な空気を吸っていると書き送っている⁽⁸⁸⁾。

それでは北京で彼はどのような情報活動を行っていたのであろうか。渡清直前に福島は、北京の日本公使館付武官が不在のため、山東省以北に駐在する将校の管理を行うよう命じられていた⁽⁸⁹⁾。そこで彼はこの任務を行うとともに、北京を中心とした諜報ネットワークを構築することに取りかかる。

北京に来て福島が驚いたのは、前任者の梶山鼎介少佐（1880年3月から82年7月まで公使館付武官）がこのネットワーク作りをほとんど行っていなかったことであった。福島はかねてから「北京ハ暗夜同様ニテ何も不分土地ナリ」と聞いていたが、現地に来てみるとそれは「全クノ大間違」であり、暗夜同様であるというのは、実は「当時事ニ任スル者之不注意怠慢」に由来するものであることがわかった。そこで北京に残ってから公使館付武官に任官するまでの半年余りは、前任者の蓄積がないため、「只タ不充分之手足ヲ得ル為メノミニ費ヤシタ」、つまり自分の手となり足となる協力者、エージェントの確保から始めなければならなかったのである⁽⁹⁰⁾。そのためには「苦心シ、少シク計画相立テ、随分高価之種」を蒔いたというから、金銭を用いて清国人を買収したのであろう⁽⁹¹⁾。のちに触れる巡捕營（北京城外城を警備する漢人部隊）左營の書記もその一人であった。また彼は、清朝皇帝の近衛兵である禁旅八旗の1つであり、洋鎗（西洋式小銃）など銃砲を専門的に訓練する火器營（北京城内の内火器營と城外の外火器營がある）のうち、外火器營の火薬局の建物配置図を写し取っているが⁽⁹²⁾、これもそうした協力者を得てのことであらうか。

こうして「種まき」によって諜報ネットワークを築いていった福島であるが、今後もし梶山少佐にそれを引き渡せば、たとえ自分がどれほどの精神をもって注意を述べても恐らく馬耳念仏になってしまうだろう、「一朝ノ不注意、怠慢アラハ忽チ根モ葉モナキ様相成候ハンカト、夫ノミ遺憾々々々々ニ堪ヘス」という。そのため自分が帰国するまでは後任者の派遣を見合わせてほし

い、「適当之人物」〔インテリジェンスのセンスがある人間〕は事に臨んでどれほど焦っても急いで得られるものではない、「徐々正々手段ヲ広メ、徐々正々人物ヲ養ヒ、数年之後ニ至テ始テ完全スルヲ得ベキモノナラン」と管西局の杉山に訴えている。後任者の人選が行われる間、必要な事件については〔自分が作り出した〕「使役隊」から直ちに報告されるように手配しておくから大丈夫である、何卒ご一考をと福島は嘆願した⁽⁹³⁾。管西局ではこの願いを聞き入れたのであろう、彼の帰国後、在北京武官の後継者はすぐに決定されず、梶山が再任することもなかった。

再び現地での福島の活動を見ると、彼は管理将校として数名の派遣士官を取りまとめながら現地に溶け込もうとした。福島とその下にいる将校たちは「書生」に偽装して市中に潜伏し、情報収集にあたるかわら現地の教師3名を雇って中国語を学んだ。「一同戒心ニ戒心ヲ加ヘ、口ニ書生ト称シテ、衣食什器六人之真似ヲ致シ、自ラ禍ヲ招ク様之儀ハ殊ニ注意シ、名実相違ハザルヲ外見トシ、実益ヲ得ルヲ主意ト仕候」。当時北京にいたのは福島大尉（1883年2月に進級）と同様にその前年の82年に現地入りしたばかりの小田新太郎中尉、倉辻明俊（靖二郎）中尉、牧野留五郎中尉であり、ここでいう「一同」も彼らではないかと推測される。やがて小田は鎮江、倉辻は満洲、牧野は煙台に散っていくが⁽⁹⁴⁾、それまでの間、福島の下で書生のふりをして語学力の向上に努めていたのであろう。以前、そうした派遣将校が教師を招いて分不相応な饗応をし、疑いを招いたことがあったため、彼らはそのようなことはせず、「何事モ貧乏ラシク」演出し、教師側から「近来ニ至リ全ク異種類之真書生ナルベシ」といわれるようになっていた。日本公使館の外交官の中には北京到着時のままのみすぼらしい体裁の派遣将校たちを疎んじる者もいたが、それに反発を感じる福島は余計に自己の意志を固めていた⁽⁹⁵⁾。

1883年6月2日付で公使館付武官に任命されると、当然のことながら福島は各国外交官、武官との社交の場に出なければならなくなった。とくに新年の交際は忙しく、84年1月はイギリス、フランス、ロシア、スペイン公使主催の夜会、晩餐会が7回、2月はイギリス、フランス、ロシアのほかにも榎本武揚公使夫人主催の晩餐夜会（榎本自身は不在中）も含めて5回の招待があった。そうした経験がない福島は、はじめは東京に出たばかりの「田舎漢」が二汁五菜〔日本料理の正式な膳立て、本膳料理〕の案内を受けたのと同然で「甚タ困却」したが、間もなくマナーも覚え、「安心」して臨めるようになったという⁽⁹⁶⁾。

そうした役目を果たす一方で、福島は情報活動を推し進めた。それは2つの局面から見ることができる。第1に清国情勢の考察と報告であり、第2に清国軍のデータ収集である。まず第1について述べると、1884年6月、安南（ベトナム）の保護国化を進めるフランスとその宗主権を主張する清との間で清仏戦争がはじまった。7月、フランス極東艦隊は福州の閩江を封鎖して清側に圧力を加え、8月23日には馬江海戦が起これ、仏艦隊の福州砲撃によって福州船政局と福建水師が壊滅した。馬江海戦前の緊張が高まっていたころ、福島はイギリス公使館書記官から、清は「無謀ノ戦端ヲ開クカ如キ事ハ決シテ之アルマシト信ス」、またフランスも「陽ニハ威権ヲ示スニセヨ……弥々ノ場合ニ至ラハ仲裁ニ局ヲ結ブニ至ルベキカト愚考仕候」との情報を得、そ

れを山県に報告した⁽⁹⁷⁾。さらに福島はそうした情報をもとに「清法事件モ次第ニ切迫之模様ニ候得共、互ニ虚勢之張合ナレバ、尚ホ如何形勢之変スルモ計ラレス、矢張り十中八九和局ト推察仕候」と杉山に伝えた⁽⁹⁸⁾。しかしその直後に馬江海戦が起こり、福島の予測ははずれることになった。これは情勢判断に失敗したケースである。他方、福州駐在の小沢豁郎中尉はそれ以前から「福州砲撃ハ旦夕ニ在リ」として在上海の管理将校・島弘毅大尉に、仏軍の参謀部に入って戦いが始まれば戦況をこの目で確かめたいと強く希望していた⁽⁹⁹⁾。しかし島は「君ノ心ニ感スル所ハ切迫ナルヘシト雖モ、全局ヲ明ニ見レバ概シテ左程切迫ナラス」と判断し、小沢の独断的な要求に対しても批判的であった⁽¹⁰⁰⁾。北京の福島や上海の島から見れば仏艦隊の福州砲撃は可能性が低いと考えられたが、現地にいる小沢からすれば破局は間近であると感じられ、その通りになったわけである。

時にそうした判断の誤りもあったにせよ、福島は北京の清国軍の兵営や演習を見学してその実力がどの程度のものかをさぐっていた。禁旅八旗の神機營諸隊の春季演習を見学した際は、「昨年春季ヨリ一ヶ年間、更ニ秋毫ノ進歩ヲ見ス。陣式、都テ昨年ニ同シ」としている⁽¹⁰¹⁾。その後、福島は清仏戦争に連動して北京でも神機營をはじめとする八旗、および緑營の合計 6,000 人が進発準備の命令を受けたことを報告している。しかしながら北京において清国軍の内情をつかむようになっていた福島は、表面的な数字に幻惑されなかった。まず彼は「六千人中三千八百人ハ皆ナ火繩銃ノ兵ナリ。如何ニ事情ニ疎キニセヨ、歐洲ノ強国ニ対スルニ火繩銃ノ兵ヲ加フルハ、余リ奇ナリト云フベシ」と指摘する。さらに 6,000 人のうち半数を占める緑營の巡補五營三成隊 3,000 人はもともと選抜された部隊であったが、長い年月の間に弊害を重ねるようになっていた。部隊の上級者は緝捕〔罪人を捕えること、治安維持〕や宿直などの業務に兵を兼用することによって部隊全体の人員を削減する一方で、実際には存在しない「空名ノ数」を増やし、その分の食糧をことごとく士官の間で分配しているという有様であった。「故ニ此次三千ノ進発ニ際シテハ非常ノ困難ヲ生スルノミナラス、且ツ此三千モ其額ニ満タス。現今貧民等ヲ招募シ、補欠中ナリ」。また下級者の中には 1 人で 2、3 名の姓名を設けて、2、3 ヶ所の錢糧を受領している者もあり、たとえば 1 人で八旗の護軍營と驍騎營、緑營の巡補營の兵隊を兼ねるといった具合であった。「上下衆弊ノ余、竟ニ此ニ至リシヲ以テ、亦タ法ノ咎ムベキナシ」、これが軍隊の現状だということである⁽¹⁰²⁾。

さらにつづいて、そうした部隊に弾薬が支給され、行営營務処（出征本営）が設置されたことを知ると福島は、「抑モ是ノ如キ兵ヲ駆テ戰場ニ出サントス。真カ戯カ実ニ解セサルノ甚シキモノトス。……北京額護十五万人中、攻守ノ用ニ堪ユベキモノ僅ニ数千ニ過キザルナリ」とし、加えて第 2 次出兵を想定して 1,000 人の練軍増設が決定されると、その員数を埋めるためには「一千ノ貧民無頼」を集めざるを得ないだろうとした。また北京で 5,000 人の兵を動かすには 1、2 ヶ月分として 20 万余両が必要になるというが、前年、黄河の水害のため神機營は数 10 万両の貯えのうち 30 万両を支出し、戸部〔財政担当の中央行政官庁〕の銀庫も甚だ困難な状況にあるとし

て、財政面からいっても清国軍が表向きほどの動員ができないことを予測した⁽¹⁰³⁾。

以上はその地に腰を降ろしてじっくりと観察しなければわからないような内情である。北京における福島の情報活動が単に対象の表面をなでるのではなく、相当の深みに入りつつあったことを示すものであるといつてよいであろう。

一方、上海駐在の島弘毅も、清国兵は人数が多数であるが、その多くは新たに募った勇營の兵隊で「不熟練ハ固ヨリ不規則」であり、欧米の兵といえども1年目は訓練、2年目からようやく射撃に熟するところを、急に「新募無頼漢」に精巧な銃器をもたせて使用できるのであろうか。ところが清朝政府の頼むところは八旗、緑營ではなく、このにわか募集の勇營兵なのだとしている⁽¹⁰⁴⁾。香港駐在の島村干雄中尉は馬江海戦後の福州の状況をつかみ、「支那の遺兵、此頃集て強盗をなし、住民及居留地の差別なく乱暴候」と報告している⁽¹⁰⁵⁾。また荒尾精（義行）中尉も清国から帰国した際の復命書（1889年）の中で、清の「軍隊の腐敗其極に達す」としているが、そうした荒尾の認識は福島のそれと一致するものであった⁽¹⁰⁶⁾。

このように現地にあった者は口をそろえて清国軍隊の腐敗を報告しているが、こうした点は現代の研究者も指摘しているところで、彼らの観察の多くはほぼ正確であったと考えられる。先行研究が述べているように、もともと明朝を征服した満洲人を中核とする八旗は、大平に慣れ、祖先とあまりにかけ離れた世代となっていた。近衛兵である禁旅八旗のうち、北京城内城を警備する歩軍營は、外城と城外を担当する緑營の巡捕營とともに、北京の治安警備にあたる歩軍統領衙門の一環を構成したが、日清戦争直前の1894年には同衙門の「退廢が極まり」、歩軍營と巡捕營はともに欠員が多く、北京の治安警備に事欠く状況であった。そのため日本との戦端が開かれると、慌てて増員をはかった⁽¹⁰⁷⁾。

明末の遺兵を整理改編したことにはじまる漢人からなる緑營については、兵士の多くが生計維持のため副業（農業や商業）に従事し、籍だけ營に置いているケースが相当数あり、現実に在營して演習に参加する兵は少なく、動員ともなれば遅滞をきわめた。また将官が機械的に員数をそろえるだけで事足りりとしていたため、市井遊惰の無頼者が入り込み、彼らは盗賊追捕の任務を利用して、盗賊より賄賂をとって見逃し、逆に盗賊の名を借りて村民を脅迫したほか、兵隊はアヘン窟や賭場に集まるのを事とした。このような状態の緑營から精兵を選び出して再編成、再訓練したのが練軍であったが、この練軍も依然として緑營の悪弊を受け継いでおり、兵卒は演習による離郷を好まず在地に留まり、他所での演習には人を雇って代行させ、遠征の場合はそうした雇い人も動員を拒んだため、「乞食や窮民」を代理兵として雇わざるを得なかった。すなわち「兵は一人だが、人はその間三回変った」という有様であった。最強とされる直隸練軍ですら、軍としての統一性を欠き、編成も新旧混在で、兵隊の多くは家を恋しがって遠方に赴くことを忌避した⁽¹⁰⁸⁾。

また太平天国の乱以後、正規軍の八旗、緑營に代わって活躍するようになった勇營においても同じような体質が基本的に継承され、勇營兵濫造の結果、悪質の者が好んで入営し、街中に紛れ

込んで盗みを働くなど、勇營は「無頼遊民の拠点」となっていた。八旗と緑營が弱体化した結果、上記の練軍と勇營が日清戦争まで清朝の中樞軍隊であり、日本の参謀本部も清国軍隊の中で有効なものはこの2つに限られると見ていた⁽¹⁰⁹⁾。実際、壬午軍乱、甲申政変、日清戦争に出動したのが李鴻章が率いる勇營の准軍であったことは既に述べたが、そうした中樞軍隊でも、よくいわれる「好鉄不打釘、好人不当兵」(良い鉄は釘にならず、良い人は兵にならない)の状態を免れなかった。

福島ら派遣将校が観察対象とした清国軍隊は、現実において以上のような様相を呈していた。そうした清国軍の状況を報告する一方で、福島は安南をめぐる清とフランスの対立が深まる中、「当国之無力無智ニハ益々驚入候⁽¹¹⁰⁾」との思いを深めていった。自ら基隆を攻撃しておきながら清に賠償を求めるといったフランスの態度を見た福島は、これでは「万国公法ハ無用之具文」にすぎない、このような世界では「腕力ニ非レバ虎狼横行ヲ制服シ国威之伸張ヲ企望ス可ラス」、自分は明治13年に『隣邦兵備略』第1版を編纂した際の主意を回想し、「講武練兵之要益之急務ナル事」を深く脳底に貫徹したと山県に書き送っている。フランスに侮られる清を見て、軍事力の強化を痛感したというのである。さらに馬江海戦の直前、清朝政府が事態をコントロールできないままフランスとの和平交渉のやり取りを各国に発表すると、「実ニ清国之無氣無力ナルヲ自ラ天下ニ公示シタルニ異ナラス。到底為ス事能ハサルヲ証明シタルモノニテ、隣邦之情実、遺憾ニ覚候」とした⁽¹¹¹⁾。もはや清は西洋列強の進出を防ぐ機能を果たすことができなくなっているというのである。

このような見方は福島だけでなく、福州の小沢豁郎は「実ニ今日の形勢ニ支那人の無氣無力ナルハ申迄も無之候得共、外ナカラ切齒之事ニ御座候。嗟呼、四百州無人カト被存候」と嘆き⁽¹¹²⁾、上海の島は「清仏之悶着モ……福建ニ於テ破裂致シ、清兵之敗亡恰カモ約束ノ如ク、実ニ氣之毒ノ次第二御坐候」と嘆じた⁽¹¹³⁾。彼らも福島と同様に、清が列強の進出を防ぐ盾となることは無理であるという実感を深めていたと考えられる。馬江海戦で清は完全な敗北を喫したが、清仏戦争を通じて戦いに敗れ続けたわけではなく、フランス側の失態もあった。しかし安南をめぐる清仏間の緊張と戦争を通じて福島は清から離れていき、杉山に次のように述べている。

……〔清は〕過般大層ラシク山西北寧ヲ侵サハ、直に開戦ニ及フ云々、空威ヲ示シ候節モ片腹痛ク存居候処、果シテイザト云フ場合ニ相成候ハ、志真面目ヲ顯シ、一挙一動貴意之如ク、兎戯ニ類セザルハナシ。併シ支那流先生之、支那人ハ耐忍力アリト云フハ究メテ此辺之事ナルベシ。本邦之有志者、亞洲之衰運ヲ挽回センニハ、東洋論ヲ以テ支那ト聯合セザル可ラスト切論スルハ至極最之事ニテ、頗ル高尚之議論ナレトモ、餘リ高尚過キテ時宜ニ適セス。豚児ニ東洋論ヲ説クハ、恰モ小兒ニ左伝ノ講義デモスルガ如シ。何デモ二百十日ノ一大段落ヲ経過セシ以上ニ非レハ決シテ齡スルニ足ラス。又恐ル、ニ足ラザルナリ。又此度之事件ニ付急ニ百姓乞丐等ヲ招集シ、練勇トカ何字軍トカ立派ナ名ヲ付テ意氣揚々タルハ馬鹿ラシク

モアリ，又氣之毒ニモアリ。既ニ是等兇戯ニ類スル挙動之為メ，随分地方人民之油ヲ吸ヒ取りタルコトト奉存候⁽¹¹⁴⁾。

信念の欠如，兇戯に等しい対応を見る限り，清と連合するのはとても無理である。二百十日の試練を受けて目覚めない限り，清は日本と並び立つことはできず，また恐れるに足らないというのである。このように福島は，とくに清仏危機を通じて日清提携不可能を痛感したと考えられるが，陸軍指導層も同様であった可能性が考えられよう。

在北京公使館付武官として福島が行った情報活動のうち，第1の清国情勢の考察と報告について見てきた。つづいて第2の清国軍のデータ収集について述べる。それまで福島は山県参謀本部長の指令で清国軍の兵力数を明らかにした『隣邦兵備略』第1版・全1冊（1880年11月）と第2版・全4巻+付図（1882年8月）を編纂していた。しかし第1版は3週間，第2版は2ヶ月間というごく短い期間に作成したもので，本人も納得のいかない部分が多かった。特に問題であるのは，第2版のデータが清の嘉慶年間（1796-1820年）のもので，最新のものとほど遠い点にあった⁽¹¹⁵⁾。そこで北京での福島にとってそれまでの『隣邦兵備略』をリニューアルした第3版をつくるのが大きな課題であり，そのためのデータ収集が不可欠の任務となった⁽¹¹⁶⁾。

この資料収集は，最初の手掛かりをつかんだ1883年12月から帰国のため北京を出発する前日の84年10月4日までの10ヶ月間にわたった。作業開始から3ヶ月半後，ある程度のもどがついた福島は，次のように杉山に書き送っている。昨年来種々苦心し，昨年12月12日，手掛かりを求めてより110日目の一昨日夜，「シナ十八ショウウノレンゲン并ニリョクエイノ数，昨年ノ調査ニ係ルモノヲ得タリ。ゼンコク ユウヘイノ数モ本月中ニ八十中八九目的ヲ達スル積ニ御坐候」。この110日間には新しく聞くものがすこぶる多く，「自身ナガラ冷汗ニ堪ヘザリシ事」もあったが，「事業之目途モ確ト相定候」。また別冊の兵制類聚は40巻にて全備の目的であるが，もし帰国命令が早めに出れば事業上，支障をきたすので，それを懸念している⁽¹¹⁷⁾。このように福島は「手掛り」を求めて試行錯誤した結果，ある時点からすみやかに情報を入手できるようになった。『隣邦兵備略』第3版の別冊となる『清国兵制類聚』も完備するつもりであると伝えている。

上記でいう「手掛り」が重要文書にアクセスできる清国当局の協力者であり，福島がそうした人物を抱き込んで公文書を集めたことは知られている⁽¹¹⁸⁾。彼はそのようにして文書を丸ごと入手してしまうことを「生擒にする」と呼んだ。つづけて杉山に送られた書簡には次のようにある。「本月〔四月〕十四日マテニ毎省之総スウ丈ケハ生擒仕候。」それから一步を進めて，小分けに着手していくが，淮軍については「大タン之サク略ヲ試ミ」ているものの必らずとは申し上げかね，各省駐防八旗は昨冬に各地から差し出された原簿が手に入ったが，その多くは間違いなので，これから「生擒之積リニ御坐候」。さらに各省より送られた一年間の金額の詳細もわかる運びとなった。以上の三難件はこの1ヶ月で決まるだろう。帰国まで「実ニ日一日ト相迫リ，事業ハ尚ホ眼前山積シ，此頃ニテハ自分ナカラ幾ト狂セントスル様相覚候」とその忙しさを伝えている⁽¹¹⁹⁾。

すでに彼のもとには7月に帰朝するよう内示が伝えられていたため⁽¹²⁰⁾、タイムリミットが意識されるようになっていた。しかし福島は任期をわずかばかり延長するよう求めたようである。

さらにつづく手紙には、4月末に直隸、安徽の分を得、昨夜は黒竜江の分を入手し、「ドーヤラコーヤラ守備能ク全コク（イリー、東サンセイハ除ク）之分ヲ握候」とし、今やほとんど「勝敗結局之場」となったが、「弾薬之不足」から投ずべき機会を誤って再び得難き勝利を失うようになっては実に遺憾であるから、予備の7、8ヶ月分の資産〔賄路のための資金〕を送ってほしいと杉山に頼んでいる⁽¹²¹⁾。また未入手のイリ、東三省の分はすでに「生擒」にして久しい巡捕營左營の書記から確保する予定であったが、彼が病気になったため停滞し、「実ニジレットタシ。併シ十中八九間違ヒナシ」と待たざるを得なかった⁽¹²²⁾。

ちなみにこの買取工作は福島だけで行ったのではなかった。やはり日本の陸軍将校と考えられる「林氏」なる人物が協力し、「同人之射的モ追々命中之場合ト相成、本月上旬、東キ、局ノ分ハ〔光緒〕八年分ト九年春季之分ヲ握」ったと福島を喜ばせた。この「林氏」が「使役」していたのは、「ゲンカイキキヨク」1名、「鎮タイエイ書キ」1名、「シホ役所書キ」1名、「通常ノ教シ」1名、「東キ、キヨク内」1名、「ヘイエ内」1名、「海ホー支ヲキョクノ文カンガシカ」1名の合計7名であった。福島は他の派遣将校と比較してこの「林氏」を「殊ニ成業著シキ」人物として高く評価していた⁽¹²³⁾。

8月に福島は帰国の辞令を受け取り、作業も一層切迫した。「本月十九日、廿五日、三十日之三次ニ生擒スルノ約ニテ、既ニ前二回ハ入手セリ。」三次目も「三十日ニ得レバ三十一日中ニ書写シ終リ、九月一日ニハ必ス起身之心組ニ御坐候⁽¹²⁴⁾」。これを見ると、捕獲した文書はそのまま所有するのではなく、筆写していたことがわかる。ここで彼は9月1日には必ず北京を出発するとしているが、結局それでは間に合わず、1ヶ月延長して出立の前日までこれに取り組み、10月5日に慌ただしく帰国の途についた。

以上のように福島は清国当局の文書を手に入れ、筆写することに熱中した。妻にあてた書簡には、「眼前之事業ハ尚ホ山ヲ為シ、日夜之勉強モ常ニ不足ヲ覚候」、「幾ト事業ニ追ハレテ目カ廻ル程ナリ」との文言がくり返されている⁽¹²⁵⁾。あるいは、自分は少しの時間も空費せず、非常の困苦艱難を積んで国家に対する産物「五十卷三千余枚之書物」〔『清国兵制類聚』〕を著述編集してきた。そのために使った紙数は1万3,000余枚で、月平均650枚の割合である。このように追々目的に達するようになったのは身体の健康と「持前之強情」があったからだ。「安正ニシテ若シ強情ナカリセハ、此成業ハ逆モ覚東ナシ。常ニクソーニテノ熱血胸中ニ充滿セシ為メナリ」と書き送っている⁽¹²⁶⁾。それほど執念を込めて編纂した『清国兵制類聚』とはどのような内容であったのだろうか。全65巻という大部のため詳しく紹介することはできないが、以下に掲げた各巻のタイトルによってその中身をうかがうことができるであろう。参考までに福島がその巻を完成させた日付も記しておいた⁽¹²⁷⁾。

『清国兵制類聚』総目次

卷之1	清国兵制類聚総目〔全巻の総目次〕	
2	驍騎營摘要雜件	1884年 3月28日 成
3	旗纛号衣	8月10日
4	神機營總理衙門 歩軍營新設技勇兵	6月21日
5	巡補營	6月 8日
6	神機營各隊点驗馬匹器械細冊第一	6月 3日
7	神機營各隊点驗馬匹器械細冊第二	6月10日
8	神機營要領十二件	1883年12月 1日
9	八漢排槍隊日記〔光緒9年4月1日～5月28日〕	11月25日
10	八漢排槍隊日記〔光緒9年6月1日～9月20日〕	11月25日
11	神機營營務処 班上弁事摘要	1884年 4月 4日
12	神機營營務処 班上弁事摘要並賞号簿	7月19日
13	神機營馬歩隊 火葯核銷細冊	4月13日
14	光緒九年七月分 神機營三款総冊摘要	1883年12月15日
15	光緒八年春季 神機營野營日報	1884年 7月18日
16	神機營陣図説	1883年12月23日
17	光緒九年二月分 神機營三款総冊馬隊	12月29日
18	光緒九年二月分 神機營三款総冊歩隊	12月29日
19	神機營陣図五種	1884年 1月29日
20	神機營陣図五種	2月17日
21	旗營三処官兵数目	3月18日
22	旗營五処軍器数目細冊	3月23日
23	旗營七処軍器数目細冊	4月15日
24	巡捕左營餉鞘報告〔光緒8,9年分〕	3月20日
25	光緒九年 各省進京餉銀数目	5月29日
26	朝暘門輸入豚数〔光緒8年8月～9年7月〕	5月31日
27	京外奏議拔萃〔光緒9年1～4月〕	7月13日
28	京外奏議拔萃〔光緒9年5～8月〕	7月14日
29	京外奏議拔萃〔光緒9年9～12月〕	7月13日
30	京外奏議拔萃〔光緒10年1～5月〕	7月21日
31	緑營諸標練軍營兵数目	5月 1日
	第1直隸省 第2山西省 第3陝西省 第4甘肅省 第5四川省	
	第6雲南省 第7貴州省 第8広東省 第9広西省 第10福建省	

	第 11 浙江省 第 12 江蘇省 第 13 安徽省 第 14 江西省 第 15 湖北省 第 16 湖南省 第 17 河南省 第 18 山東省	
32	各省練軍 直隸練軍 安徽練軍 江南練軍 江西練軍 山東練軍 河南練軍 広東練軍 湖北練軍 福建練軍 広西練軍 盛京練軍 貴州練軍 山西練軍 湖南練軍 浙江練軍	8月 1日
33	各省營勇（防勇）数目 淮軍各營 直隸各營 甘肅各營 広東各營 福建各營 台湾各營 船政輪船 浙江各營 江南各營 安徽各營 清淮各營 江西各營	5月 7日
34	營勇追補 湖北之部 台湾之部 浙江之部 清淮之部 江西之部 江南之部 河南之部 山東之部 盛京營勇 吉林營勇 新疆營勇 盛京各營清冊 吉林營勇清冊 関外兵勇数目	7月 9日
35	駐防八旗 盛京駐防 吉林駐防 黑竜江駐防 畿輔〔=直隸省〕駐防 察哈爾駐防 山西駐防 陝西駐防 甘肅駐防 四川駐防 広東駐防 福建駐防 浙江駐防 江蘇駐防 湖北駐防 河南駐防 山東駐防	6月 4日
36	駐防八旗 配置現額 盛京駐防 吉林駐防 黑竜江駐防 直隸駐防	7月11日
37	駐防八旗 配置現額 山西駐防 陝西〔陝西〕駐防 甘肅駐防 四川駐防 広東駐防 福建駐防 浙江駐防 江南駐防 湖北駐防 河南駐防 山東駐防	7月12日
38	各省練軍營勇〔防勇〕要件	8月26日
39	雜録	5月22日
40	雜録	4月27日
41	神機營各隊名簿〔光緒 9 年 12 月〕〔所属, 階級, 氏名, 年齢〕	7月 5日
42	神機營各隊名簿〔光緒 10 年 1 月〕	7月16日
43	神機營各隊名簿〔光緒 9 年 12 月〕	7月30日
44	神機營各隊名簿〔光緒 10 年 1 月〕	8月 5日
45	神機營各隊名簿〔光緒 9 年 12 月 19 日〕	8月10日
46	神機營各隊名簿〔光緒 9 年 12 月〕	8月19日
47	神機營各隊名簿〔日付なし〕	8月24日
48	神機營各隊名簿〔光緒 9 年 12 月〕	8月 6日

- 49 黒竜江〔省〕練軍花名冊〔花名冊＝名簿の意〕〔光緒10年1月1日〕 8月26日
- 50 各省八旗駐防造報清冊〔光緒2, 6, 7年, 主に6年〕 9月2日
- 51 各省兵勇報告 甘肅之部〔光緒9年甘肅新疆總糧台関内勇数夏季報〕 9月22日
- 52 各省兵勇報告 湖北之部〔光緒8または9年湖北善後総局兵勇冬季報〕 9月22日
- 53 各省兵勇報告 兩江之部 9月22日
 光緒9年金陵防營支應総局兵勇春季報
 光緒9年江南蘇松太道各營哨勇春季報
 光緒9年太湖水師支應所哨勇戰船春季報
 光緒9年淮揚水師支應所哨勇戰船春季報
 光緒9年徐防支應所各營哨勇春季報
 光緒9年安徽巡撫練軍勇丁秋季報
 光緒9年總理江西善後総局兵勇春季報
- 54 各省兵勇報告 福建之部〔光緒9年夏季報〕 9月23日
- 55 各省兵勇報告 河南/浙江/広東之部〔光緒9年春/夏/夏季報〕 9月22日
- 56 各省兵勇報告 直隸之部〔光緒9年秋または夏季報〕 9月22日
- 57 各省兵勇報告 天津五營之部〔五營＝中・前・後・左・右營〕〔光緒9年秋季報〕 9月22日
- 58 各省兵勇報告 大沽六營之部〔六營＝前右・中右・後右・前左・中左・後左營〕〔光緒9年秋季報〕 9月22日
- 59 各省兵勇報告 督撫奏議〔光緒10年春〕 10月4日
- 60 各省兵勇報告 甘肅関内〔光緒9年〕 10月4日
 甘肅新疆總糧台造具 光緒九年分関外駐防馬歩各營旗寔存弁勇数目駐防処所
 地址清冊
- 61 各省兵勇報告 甘肅関外〔光緒9年秋〕 10月4日
 甘肅新疆總糧台造具 光緒十年春季分関内馬歩各營旗寔存弁勇数目駐防処所
 清冊
- 62 各省兵勇報告 金陵〔光緒9年秋〕 10月4日
- 63 各省兵勇報告 湖北, 浙江〔光緒9年秋冬兩季〕 10月4日
- 64 各省兵勇報告 福建〔光緒9年冬, 10年春〕 10月4日
- 65 各省兵勇報告 盛京 淮軍 山東 広東〔光緒9, 10年〕 10月4日

この全65巻にわたる『清国兵制類聚』は、光緒8年から10年(1882～1884年, 明治15～17年)における清国軍各種部隊の主に人数を記した中国語の公文書をまとめたものである。福島が「生擒」にしたものを筆写, 整理したものと考えられよう。ここから清国軍の兵力数を割り出す

ことが可能となるが、正規軍の八旗、綠營に代わって清国軍の中核となり、とくに重要な役割を果たしていた勇營の兵数については巻之 59「督撫奏議」に以下のように示されている。

直隸	光緒 9 年 6 月止	3,286
淮軍	光緒 9 年秋季分	22,571
山東	光緒 9 年 12 月止	7,443
山西	光緒 6 年奏報	5,700 余（又光緒 9 年奏添馬勇四五百名未報清冊）
江蘇	光緒 9 年秋季分	水陸 31,233
安徽	光緒 9 年 12 月止	5,566
福建	光緒 9 年冬季分	9,843
台湾	光緒 9 年春季分	6,558
浙江	光緒 9 年秋季分	10,668
江西	光緒 9 年冬季分	7,078
湖南	光緒 9 年奏報	11,119
湖北	光緒 9 年秋季分	11,279
広東	光緒 9 年冬季分	21,307
広西	光緒 5 年奏報	29,536
陝西	光緒 9 年分	13,288
四川	光緒 9 年咨報	11,755
船政大臣	光緒 9 年冬季分	826
甘肅	光緒 9 年冬季分	13,293
河南	光緒 9 年冊報	12,751
雲南	同治 12 年〔1873 年〕底開單案門	42,700
清淮	光緒 9 年 6 月止	3,708
貴州	光緒 6 年奏報改補兵額別無另招勇營	
合計		282,008

さらにこの『清国兵制類聚』で着目する必要があるのは、ただ清国軍の資料を並べただけでなく、部分的（巻之 4, 5, 39, 40）に福島が日本語のコメントを付し、清国軍隊の実態を説明している点である。たとえば禁旅八旗の 1 つ、歩軍營に新設された技勇兵については次のように解説される。新旧の技勇兵は支給される餉銀に区別はないが、糧米には多寡があり、古い技勇兵は毎季 5 石 2 斗、新しい技勇兵は毎季 3 石 2 斗である。ただしこれは表面上の規則であって、実際はそれに大いに反し、数多くの「弊害」がある。自分〔福島〕がこの糧米を実見したところ、「粒ニ虫穴トナリタル変色ノ腐敗米」でしかも泥土が混ざり、「鳥獸ト雖トモ尚ホ避テ喰ハサル」よ

うなものであった。兵隊は米を受け取る引換券の米票を安い値段で売却せざるを得ず、その米票を買い上げるのは他でもない将校である。また演練を行わないので火薬を用いることもなく、たまたま粗悪な火薬を将校が市中に売却して利益を分け合っている。春季と秋季の演習では弾丸が支給されるが、それは有名無実で、発射する弾丸はいくばくも無く、残ったものを熔解して鉛板にし、市中に売却してやはり将校がその利益を分け合っている⁽¹²⁸⁾。

また同じく禁旅八旗の内火器營の秋季演習を見学した福島は、次のような光景を目撃したという。演練が始まる直前、翼長の点呼は「頗ル厳」であったが、隊列は「頗ル混雑ヲ極メ」、互いに人員を都合しあい、1人の隊長の下に10名の兵がいるべきところを11名いて、かえって問い質され、甚だしきに至っては後ろの方にいた馬夫を呼んで、それに制服を着せてごまかそうとする者もいた。「廢弛モ既ニ此極ニ至ル、実ニ驚クニ堪タリ」。終了時の点呼も無秩序で、制服を脱いで勝手に帰ってしまう者も多く、そうした部下のふるまいを将校たちも気にかけていなかったという⁽¹²⁹⁾。

さらに福島によると、北京城外城を警備する漢人部隊の巡補營では、馬兵の官馬の生存期限を5年とし、この期限内に馬が亡くなれば本人が賠償し、その後で死ねば9両が支給されることになっている。そこで5年の期限が来ると馬が死んだと詐報し、新馬購入代9両を受け取るのが常となっている。ただし手数料を払わないといけないので、巡補營の左營では本人の受領金はわずかとなるが、中營では他人の名をかたって偽報し、受領銀すべてを副将以下の官吏で分配している。また巡補營〔の左營か〕の人数は原設1,600名のところ実際には練軍を含めて1,080名で、残りの500余名は名簿にあるだけで実在しない。しかもこの1,080名も、巡捕の任務を練軍にやらせ、平常サービスの兵数を減らしているため、実際は練軍480名を含めて600余名で、残りはやはり実在しない。つまり架空の合計1,000名の錢糧は管内大小の官吏が分配している。巡補營五營の状況はいずれもおおむねそのようなもので、五營あわせて1万の兵は練軍以外ほとんど有名無実である⁽¹³⁰⁾。

以上のように福島はコメントしているが、そこに見られるように、彼は北京で実際に歩軍營、内火器營、護軍營の状況を自分の目で確認し、巡補營の内部事情にも通じていた。つまり『清国兵制類聚』は、表向きの文書からは見えてこない裏面の事情にも注意を促す資料集であった。

福島が情報収集の過程で入手した文書で、そのほかにも見ておきたいものがある。それは兵力数ではなく、武器の数を記した資料である。たとえば『金陵機器製造局造呈』とタイトルが付けられた文書は、南京の金陵機器局作成の報告書と考えられるが、そこには光緒5～6（1878～79）年に同局で製造された西洋式小銃、大砲、砲弾、水雷などの数が種類ごとに詳細にリストアップされている⁽¹³¹⁾。また『廣東報銷總局造報善後第三案調派旗營官兵習』には、光緒9（1883）年の福建軍の各部隊や福州砲台の兵力数に加え、同軍の小銃、ならびに各種大砲、砲弾の種類と数が記載されている⁽¹³²⁾。

さらに日本にとって重要となる淮軍が所持する兵器については、光緒8（1882）年の『淮軍報

総局造呈』が、大砲については「2ポンド熟鉄後進過山砲4、クルップ2ポンド後膛来福鋼1、六個半生の密達両ポンド後膛過山砲8、3ポンド単身銅開花砲5……」、作弾については「2ポンド過山砲色鉛作弾765個、2ポンド寔心鉄弾200個、2ポンド後膛来福開花子7,600個、2ポンド後膛包鉛来福開花3,000……」といった調子で、そのほかの雷管、水雷にいたるまで延々と種類ごとの数をあげていく⁽¹³³⁾。これによって日本側は淮軍のもっている兵器の種類と数をほとんどすべて把握したのではないかと考えられる。このように福島は『清国兵制類聚』として整理された資料に加えて、さまざまなデータを貪欲に収集していた。

以上のような過程をふまえて帰国後の福島はさらに整理を進め、情報を取捨選択した結果、1889（明治22）年3月に『隣邦兵備略』第3版が刊行された。同書のもっとも重要な点は、最新データにもとづいて各省・地域ごとに清国の陸軍兵力数を割り出していると考えられることである⁽¹³⁴⁾。以下の表を参照されたい。

表 『隣邦兵備略』に示された清国軍兵数

	八旗	緑營	練軍	勇營	蒙古兵	遊牧兵	回兵	番兵(西藏)	江兵	海兵	合計
第1版	310,933	618,627		51,300	100,782						1,081,642
第2版	266,827	598,019	12,000	97,750	99,239	18,584	1,636	3,162	13,242	8,280	1,118,739
第3版	250,076					101,487		3,162	11,987（長江水師）		

（『隣邦兵備略』第1～3版より作成）

註1：ちなみに福島自筆「隣邦兵備略第三版次序卑見」（執筆年月日記載なし、「福島関係文書」50）は、八旗30万、蒙古兵10万のほかに、緑營47万、勇營・練軍30余万、合計110余万人としてその概数を提示している。また近年フランスと戦い、軍制改革の必要を深く感じた清国では兵備拡張をはかり、とくに勇營・練軍、海軍の進歩が著しいと指摘して日本側の戒慎を促すとともに、新型の銃器をもち、攻守の用をなすのは勇營・練軍だけであるとし、営内の弊害・腐敗もあげて、そうした清国軍のプラス面、マイナス面の双方を相対照してはじめてその実力を推究できるとしている。この序文は『隣邦兵備略』第3版には掲載されていない。

註2：日清戦争に際して日本陸軍は対清作戦計画の基礎として、勇營・練軍を40余万人と想定した。しかし戦後の精査では約35万人（349,700人）であることが判明した。また戦時中の清国陸軍総数は約98万人であった（『明治廿七八年日清戦史』第1巻、参謀本部、1904年8月、57頁および巻末付録第3表）。

ここで明らかのように第1版から第2版に改編された際、遊牧兵、回兵、チベットの番兵、河川や海を守備する兵が付け加えられ、より詳しい内容になっている。しかし第3版になると、そうした点は同様であるが、肝心の緑營、練軍、勇營の兵数が示されていない。これはどういうことなのであろうか。

これまでたびたび触れてきたように、八旗、緑營が退廃化する中、清国軍の中核となったのは、禁旅八旗に新設された神機營、緑營の精兵を選抜した練軍、在郷の紳士階級が組織した勇營であった。ところが第3版においては、第2版の本文中にあった神機營の項目が削られ、その兵数もあげられなくなっている。さらに第3版のうち第5巻は他巻の内容と全体のバランスからいって、ほぼ間違いなく緑營と練軍、勇營の説明にあてられているはずであるが、国立国会図書館（デジタルコレクションで閲覧化）、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室（安岡昭男氏旧蔵書）、天理大学附属天理図書館（福島家旧蔵書）のいずれにおいても、『隣邦兵備略』はこの第5巻だけが欠号になっているのである。そのため現時点では、上掲表の緑營、練軍、勇兵の兵数は埋め

られない状況となっている。

それでは『隣邦兵備略』を作成するための資料を集成した『清国兵制類聚』からこの数値を拾えないかという点、こちらも天理図書館所蔵の同書を見ると、以下だけが欠号になっている。

- 卷之 31 緑営諸標練軍営兵数目
- 32 各省練軍
- 33 各省営勇（防勇）数目
- 34 営勇追補
- 38 各省練軍営勇〔防勇〕要件

つまり『清国兵制類聚』（旧福島家蔵書）においても『隣邦兵備略』第3版と歩調を合わせるかのように、練軍と勇営の数を記載した巻のみが欠号となっている。これは偶然の一致であろうか。

ここで推理できるのは、それはたまたま生じたものというよりも、参謀本部と福島が意図的にそれらの巻を部外の人間に見せないようにしたのではないかということである。参謀本部にとって、（神機営とともに）練軍、勇営の兵数はいちばん重要な情報であり、その最新データをつかんだということは清国側に漏らしてはならない最高機密といつてよいものであったと考えられる。そのため『隣邦兵備略』第3版の第5巻と『清国兵制類聚』の該当巻は参謀本部の金庫の中に収められ、部外者の閲覧を禁じたのではないだろうか。

ただし勇営の兵数については、先に記したように『清国兵制類聚』の巻之 59「督撫奏議」にもあがっており、その総数は28万2,008人であった。もっともこの数字が本当に正しいものであるかどうかは断定できない。誤った数字のため、金庫に収めなかった可能性もあるからである。しかしながら『清国兵制類聚』巻之 31「緑営諸標練軍営兵数目」、巻之 33「各省営勇（防勇）数目」のタイトルが如実に示しているように、福島が練軍、勇営の兵数を割り出していたことはほぼ間違いないであろう。

以上のように福島は清国軍全体の最新兵数を提示することに成功したと考えられる。しかしこれまで述べてきたように、同国軍隊の場合、数値だけからはその実力を判断できないところがあった。福島はその点も考慮して、以下のような補足説明を行うことを忘れない。たとえば禁旅八旗については次のようにある⁽¹³⁵⁾。

- 将校の俸給……日本の大佐に相当する参領の半年の俸給は、日本でいえば62円40銭、粮米12石7斗5升、米折銀7円40銭余でこれらを合計しても日本の少佐の1ヶ月の俸給に満たない。そうした経済的苦境から弊害が生じ、賄賂が横行するのを避けられない。

- 兵隊の俸給……驍騎營の兵は月額で日本の1円80銭にすぎない。しかも銀両は秤量の際に所轄官吏が幾分かを貪るため、実際は1円60～70銭となる。生計を立てるのが苦しいため兵隊は賤業苦役に汲々と従事し、報国の精神は沮喪して兵の何たるかを知らない状況である。
- 糧米の受領……兵隊が年4回支給される糧米は、下級役人がわざと水と土を加えて腐敗させ、兵が米票を売却せざるを得ないようにする。その米票によって商人は上米を受け取り、市中で販売して数倍の利益を得、所管の大小官吏に分配するのが常となっている。
- 兵力の実際……各營では神機營をのぞいて、選抜された練軍ですら旧式兵器を用い、古来の陣法で演習を行っており、彼らは今では「無用ノ兵」となり、この積弱を改めて精練した軍隊に変えるのは一大難事である。

また北京以外の八旗については、京師に直属する直隸省でも精練の兵は見られず、古来勇敢で知られた吉林省、黒竜江省では訓練・器械がまったく旧套を脱しておらず、各省の駐防八旗も全体的に「積弱積衰ノ兵」となっており、結局全国30万の八旗は「実ニ無用ノ兵ニシテ徒ニ歳出一大部分ヲ浪費スルノミ」と福島は判定した。

こうした説明は『隣邦兵備略』第1版と第2版には見られないものである。第1, 2版は清国軍の兵力数をあげるだけに終始し、その実態にまで踏み込んで解説するということはなかった。しかし第3版では、現地で調査経験を積んだ福島が、数値の裏側にあるものをあぶり出し、そこにメスを入れている点に特徴がある。

なお『隣邦兵備略』第3版の刊行は先に述べたように1889年3月である。しかしこのとき福島は在ベルリン日本公使館で武官をつとめており、日本にいなかった。そこで同書はもっと早い段階でその原型ないし草稿が出来上がっていたのではないかと考えられる。これまで見てきたように、福島は1883年から84年にかけて膨大なデータを収集したが、その時点では文書を捕獲して筆写するのが精一杯で、そこから数字を抽出して仔細に検討を加えるところまでは行かなかったと考えられよう。そこで84年11月に帰国してから2年半後のドイツへの出立までの間にそれを進めたのであろうが、86年には半年間のインド調査旅行があったためそれどころではなく、やはり帰朝して間もない1885年に残務整理もかねてとくに集中的にデータの集約と考察分析を行ったと見るのが自然ではないかと思われる。

恐らくこの1885年に福島は『隣邦兵備略』第3版の原型となるべきものをつかみ、その結果、参謀本部は清国陸軍の最新の兵数とその実態の両面、すなわち同軍の全体像をほぼ把握することに成功したのではないかと考えられる。参謀本部は対清戦争のシミュレーション上、様々な選択肢を考えることが可能になったわけであり、相当の自信を得たであろう。先学が指摘するように、

陸軍の情報体制はその翌年の1886年より清国からロシアに移行し始めた⁽¹³⁶⁾。時期からいって、福島が清国軍に関する大量のデータを持ち帰って考察を進めたことが、この対露シフトの開始に相当の影響を及ぼしているのではないだろうか⁽¹³⁷⁾。そうした流れに沿って、福島自身も同年インドに派遣されてイギリスの対露防備を観察し、87年には武官としてドイツに派遣され、ヨーロッパにおけるロシアの南下が同国の東漸に関係することに鑑み、89年秋から90年初めにかけてバルカン半島を視察するなど、対露情報体制の再構築が進められることになる⁽¹³⁸⁾。

参謀本部と福島の視野は、ロシアの動向を念頭に置きながら、東アジアからインド、ヨーロッパへと広がっていったのである。北京での福島の情報活動とその所産は、そうした意味で日本にとって新たな変化をもたらす1つの有力な要因になったのではないかと考えられる。

おわりに

本稿では1880年代における参謀本部の対露情報活動の実態を、福島安正中尉（のち大尉）を主軸に据えて検証した。結論として以下の点を指摘することができる。

第一に軍事関連施設の偵察である。最初の渡清時、福島は北京にとどまるだけでなく、その外に出て、内モンゴルのドロンノールに向かう途中、万里の長城のふもとにある戦略上の要衝・古北口を重点的に観察するなど、北京から北の防備状況を確認した。それだけではなく、内モンゴルではチベット仏教寺院を見学し、モンゴル人や回族と接触し、馬賊の存在を比較的身近に感じ取った。つまり清国の多様性を認識して視野を広げた。

また2度目の渡清時は杉山直矢少佐とともに、①上海—南京、②煙台—天津で兵要地誌調査を行い、そのあとで杉山のみ単独で南清沿岸地域を検分した。彼らは対清戦争を想定して各地の港湾、兵営、砲台、城郭の状態をチェックし、清国側の防備体制を確認するだけでなく、江南製造局と金陵機器局の内部に入って生産状況を確認した。そうした際、2人は参謀本部の方針、すなわち先入観や偏見を排除して虚心に清国の状況を観察せよ、相手の短所よりも長所に着目せよという命題を遵守した。

第二に清国社会の観察である。杉山と福島は彼らの言葉にしたがっていえば、不潔雑踏の市街、金銭を貪る店主や舟子たち、そうした中で簡易の生活をする質朴な農民たち、金で態度を翻す下役人、災害に苦しむ人々の保護を顧みない地方官、当局の取り締まりが及ばない地方、しかしそれでいて官吏を恐れる無学な人民といった清国社会の実態を目撃していった。近代化を進める日本とくらべて文化の深度、人民の幸福度があまりにも違うというのが彼らの偽らざる実感であった。

第三に北京での清国軍のデータ収集である。上記のような実地のフィールドワークを通じて清国社会の実態に肌で触れ、モノ（兵器）とヒト（兵器を運用する人々を輩出する人間社会）の両面からそれを体感したことは、若き福島にとって大きな体験であった。そのような経験をふまえ

て北京に約2年間とどまった彼は、管理将校として諜報ネットワークの構築を開始し、公使館付武官に就任したのちは清国の情勢を報告するとともに、『隣邦兵備略』第2版をリニューアルするため、清国軍の最新データを収集することに力を注いだ。その際彼は、有能な部下の協力を得ながら、重要文書にアクセスできる軍事関連の当局者に「弾薬」（賄賂）を撃ち込み、公文書を次々と「生擒」にした。それとともに北京の清国軍を自分の目で見ることによって、表面的な数値だけでなく裏側に隠された内情も合わせ見ることができるようになっていた。捕獲した文書を総合して『清国兵制類聚』全65巻をまとめていった福島は、帰国翌年の1885年には集めたデータから清国軍の兵数を抽出し、『隣邦兵備略』第3版の原型となるような清国軍の全体像をほぼつかむことに成功したのではないかと考えられる。それが要因の一つとなって、日本陸軍は86年に情報体制を対清から対ロシアにシフトし始めたのではないか。要するに日本陸軍は、清国については日清戦争の約10年前から「敵を知り、己を知る」体制に入ったということである。

日本にとってその情報活動は大きな目的を達成したとあってよいが、細かく見ると、のちの現場に見られるような問題がすでにこのころから生じていた。その点を見ておくと、第一に日本側のカウンターインテリジェンス（防諜）には不備があった可能性がある。北京の福島、上海の島をはじめとする各地の派遣将校が送った書簡には、福島の場合は時に封蠟を施すことがあったにせよ、開封されれば相応の機密が漏れるようなものが多かった。それらには福島や島に加えて、青木宣純（広東）、池田信（香港、鎮江）、伊集院兼雄（漢口）、小沢韶郎（福州）、小田新太郎（漢口）、神尾光臣（天津）、木村宣明（上海）、小泉正保（香港）、柴山尚則（漢口、上海、厦門）、島村干雄（香港）、花坂円（天津）、広瀬次郎（広東）、松島克己（広東）、丸子方（江南・湖南・広西から汕頭に移動）、三浦自孝（広西）、山根武亮（上海、福州などを移動）、あるいは場所は特定できないが、麻利潤義、斎藤幹、牧野留五郎、美代清濯といった将校たちの動向が実名で記されている。そのころ新たに「濁音入改正暗号一号、二号」といったものも導入されており⁽¹³⁹⁾、以上の信書とは別の正式な報告書には暗号が用いられていたであろうが、今日のみから見ると書簡開封に対する警戒が薄いような印象を受ける。しかしそれらは手渡しで日本に運ばれていたのかもしれない、この点は引き続き検討してみたい。

第二にやはり防諜と関連するが、清朝当局による監視である。牛莊（營口）駐在の倉辻明俊は吉林調査旅行中、許可外の寧波塔地域に偽名の清国人に変装して潜入し、捕縛された。ただし日清間の交渉の結果、日本側に引き渡され、在上海日本総領事の領事裁判で罰金10円のみを判決を受けた⁽¹⁴⁰⁾。この事件は派遣将校たちを驚かせ、福島は倉辻の身を案じつつ、今回の事件によって吉林、黒竜江地域の調査を当分休業せざるを得ず、実に遺憾この上ないと残念がり、東京でも杉山が「頗ル懸念ナルハ……製図日記等、差押ヘラレタルニハ無之哉」と心配した⁽¹⁴¹⁾。また福島は倉辻が天津に護送され、清朝政府、直隸総督の注目を浴びる可能性が出たことを懸念し、「長ク豚尾ニ注目セラル、ハ決シテ得策ニ無之」、ひとまず上海に移して世間の様子を見合わせた方がよいと提案している⁽¹⁴²⁾。その後、管西局から分駐将校に一層の注意を促す指令が下された

が⁽¹⁴³⁾、漢口では役人が伊集院兼雄の下を訪ねて同地滞在の理由を詮索し、福州でも武官が小沢豁郎を訪ねてチェックを行い、広州でも青木宣純がフランスのスパイであると疑われ、逮捕されることを一時覚悟するなど、とくに清仏戦争と関連して各地で警戒が厳しくなっていた⁽¹⁴⁴⁾。彼らはとりあえず管西局からの指示通り注意を強化する以外に、特別な対策をもたなかったようである。

第三に上司と部下との関係である。在北京公使の榎本武揚が一時帰国した後、臨時代理公使をつとめた吉田二郎書記官は官僚的な人物であつたらしく、福島を悩ませた。吉田氏は風に柳という流儀で果断決行に乏しく、玉石を見分ける見識がないので、公使館には無恥卑劣の奴輩が出没するようになったという。公使館内は「規則ノ奴隸」となり、しかも倉辻の事件について外務省・在天津領事・総理衙門間のやり取りが福島にはまったく知らされず、相談もされなかった。「榎本公使帰朝後、益々歎息」、「榎本公使帰朝後ハ探偵之問題上ニモ多少之不便ヲ覚候」と福島はくり返し杉山に愚痴をこぼしたが、その後、榎本が復帰し、公使館の状況はやや改められた⁽¹⁴⁵⁾。このように上司に問題が認められる場合もあれば、逆に部下に問題がある場合もあった。小沢豁郎は福州で民間の「志士」と「福州組」なるグループをつくり、清国で革命を起こそうとするなど独断で政治的な動きに走り、後年の「支那通」の予兆をなすような人物であつた⁽¹⁴⁶⁾。小沢はそのほかにも馬江海戦に先立ち、フランス軍の参謀部に入って戦況を見届けたいとやはり独断的に熱望して聞かず、上海の島を困らせた。島から自制を促された小沢は「何等之罵詈、一兵卒ニ向ヒテモ尚言フニ忍ビサル語アリ」と一時は興奮したが、山根武亮大尉からも「叱ラレ」てやがて落ち着いた⁽¹⁴⁷⁾。小沢は、清仏戦争をめぐって日本への接近をもくろむフランスから便宜を受け、福州砲台の図面を写し取らせてもらうなどの成果をあげたが、その感情過多で情緒的な性格は情報将校としてマイナスに働く面も少なくなかつた⁽¹⁴⁸⁾。

最後に、陸軍の情報活動自体が以上のような問題をはらみながらも、若き日の福島が成果を示し、それをスプリングボードとしてやがて参謀本部の情報工作の中核を担うようになっていった理由を考えてみたい。第一にあげられるのは、生来のセンスである。嗅覚、直観を働かせて協力者を確保し、偵察旅行で場数を踏んだ買取を実地に応用し、情報が向こうから集まる体制をつくつた。しかもそうした中で現地調査（フィールドワーク）と情報の整理編纂（デスクワーク）の双方を実践した。もともと彼は官立の開成学校、大学南校で2年間学んだ（最後は退学）秀才であつたが、こうしたことは学校で学べるのではなく、やはり才能のなせるわざであろう。島弘毅をはじめとして福島よりも清国滞在が長い将校が何人もいたが、福島のような異能の持主はほかにいなかった。

第二に良き上司に恵まれたことである。とくに山県参謀本部長にその才能を見抜かれたことが大きかつた。長州閥と縁が深いとはいえない松本藩出身で、司法省の文官から横滑りで陸軍に入った彼を重用した山県は慧眼であつたといつてよい。また先学が着目しているように、北京駐在公使の榎本との間に見られるインテリジェンスのセンスを共有する者同士の親密な関係においても

それが見られよう⁽¹⁴⁹⁾。また杉山とは二ヶ月にわたって沿岸旅行をともにしたが、これだけの期間寝食をともにすればお互いのあらも見え、仲たがいの原因が生じることもあり得ようが、その後、福島から杉山に送られた書簡を見る限り、両者の関係は円満で、福島は杉山にたびたび愚痴をこぼすなど、この上司と信頼関係にあったことがうかがえる。個性的なタイプの福島ではあるが、基本的に周囲との人間関係は良好であったのだろう。

第三に、これは福島自身の口から語ってもらうのがふさわしい。「安正ニシテ若シ強情ナカリセハ、此成業ハ逆モ覚東ナシ。常ニクソーニテノ熱血胸中ニ充滿セシ為メナリ」。強情すなわち意志である。彼の意志の強さが、参謀本部の情報活動の勝利をもたらす有力な一因になったといつては過言であろうか。

《注》

- (1) とくに茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』（山川出版社、2007年1版7刷）を参照した。
- (2) 高橋秀直『日清戦争への道』（東京創元社、1996年再版）、34-40、12頁。
- (3) 関誠『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス——明治前期の軍事情報活動と外交政策——』（ミネルヴァ書房、2016年）、25、127、136頁。同書は1870年代後半から日清戦争開戦までの日本の軍事情報活動の全体像とその主要関係者の対外認識を明らかにするもので、膨大な一次資料を丹念に読み解き、陸軍、海軍、外務省の情報関係者の言動を精緻に検証するだけでなく、それらが政府の対外政策にどのように関係していたかという点にまで踏み込んで考察を行っている。実証性、視野の広さ、体系的のいずれにおいても従来の研究から大きく飛躍した画期的な論考であり、明治前期における日本のインテリジェンス活動を理解する上での出発点となるきわめて重要な成果である。また同書の出版前に発表された関「日清戦争以前の日本陸軍参謀本部の情報活動と軍事的対外認識」『国際政治』第154号、2008年12月も参考になる。

なお明治期から昭和期に至るまでの日本の対清（対中）情報活動の流れを巨視的にとらえるという点では、日本よりも中国の方が研究は進んでおり、単行本に限っていえば、たとえば以下のような著述がある。鍾鶴鳴『日本侵華之間諜史』（華中図書公司、1938年）、王振坤、張穎『日特禍華史——日本帝国主義侵華謀略情報活動史実——』第1巻（北京：群衆出版社、1988年）、逢復主編『侵華日軍間諜特務活動記実』（北京：北京出版社、1993年）、戚其章『甲午日諜秘史』（天津：天津古籍出版社、2004年）、戚厚杰主編『日諜在中国（1895～1945）』（石家庄：河北人民出版社、2009年）、許金生『近代日本対華軍事諜報体系研究——1868-1937——』（上海：復旦大学出版社、2015年）など。ただし日清開戦前の明治前中期については関氏の論考ほど精度が高いものは見あたらない。

- (4) 福島安正自筆「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」、国立国会図書館憲政資料室所蔵「福島安正関係文書」（以下「福島関係文書」と略称）92。これまで福島の経歴については、太田阿山編『福島將軍遺績』（東亜協会、1941年6月、大空社復刻版、1997年）巻末の年譜があるが、それを大幅に補う有用な資料である。
- (5) 山東省の煙台は芝罘の古称でも知られるが、本稿では特別な場合を除き煙台で統一することとする。
- (6) 島貫重節『福島安正と単騎シベリヤ横断』上（原書房、1979年）67-73頁。福島が隊商に加わってドロンロールに向かったというのは、後述のように誤りである可能性がある。同書は福島の嗣子・四郎氏をはじめとする福島家関係の人々から全資料の提供を受けて執筆されたもので、それまで知られていなかった福島の情報活動の様相を大きく浮かび上がらせた大変貴重な労作である。ただし一般向けの書籍であるため細かい脚注が付されておらず、出典がはっきりしない箇所が少なくない点が惜しまれる。同書は高く評価されるべき良書であることを十分認めつつ、福島の言動をより正確に理解するため、再検証が必要な部分があると考えられる。

- (7) 同上, 80頁。同書は、福島が天津上陸後に山東省の各地を廻ったとしているが、実際には山東省沿岸を北上してから天津に到着している。また篠原昌人『陸軍大将福島安正と情報戦略』（芙蓉書房出版, 2002年）、牛越国昭（李国昭）『対外軍用秘密地図のための潜入盗測〔第一篇〕— 外邦測量・村上手帳の研究 —』（同時代社, 2009年）も2回目の旅行の内容については具体的に述べていない。
- (8) 島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上, 85-87頁。
- (9) 『清国兵制類聚』については後述する。『清国神機營沿革誌』は、清朝皇帝を守る近衛軍・禁旅八旗の中に新設されたエリート部隊というべき神機營について、同治元年の設立から同6年まで（1862～1867年）の組織上の変遷とあらましを記したものである（福島安正自筆『清国神機營沿革誌』1883年7月17日起草、天理大学附属天理図書館所蔵、081-イ27-15）。なお『清国兵制類聚』『清国神機營沿革誌』など北京で福島が作成した各種資料が天理図書館に保管されていることは、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上, 92-93頁が紹介している。
- (10) 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』119, 127-28, 135頁。
- (11) 村上勝彦「隣邦軍事密偵と兵要地誌」陸軍参謀本部編、村上勝彦解題『朝鮮地誌略』1（龍溪書舎, 1981年）の折込図「清国駐在参謀将校一覧」を参照のこと。同論考はそうした数多くの駐在将校の動向を追っており、上記折込図と合わせて大いに参考となる。それ以外に同様の派遣将校を扱った論稿として、佐藤三郎「日清戦争以前における日中両国の相互国情偵察について — 近代日中交渉史上の一齣として —」『軍事史学』第1号, 1965年5月（のち佐藤『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館, 1984年に収録）、小林一美「明治期日本参謀本部の対外情報活動 — 日清・義和団・日露三大戦争に向けて —」藤澤藻, 王仲榮, 奥崎裕司, 小林一美編『東アジア世界史探究』（汲古書院, 1986年）所収（のち小林『義和団戦争と明治国家』汲古書院, 2008年増補版に収録）、六角恒廣『中国語教育史稿拾遺』（不二出版, 2002年）所収の第2章「陸軍参謀組織と中国語」、山室信一「文化相渉活動としての軍事調査と植民地経営」『人文学報』第91号, 2004年12月などがある。さらに佐藤守男『情報戦争と参謀本部 — 日露戦争と辛亥革命 —』（芙蓉書房出版, 2011年）の第1章は、福島を含む情報将校の源流と系譜・人的連続性（薩摩系と佐賀系）、ならびにその制度化の過程を検証し、参謀本部の情報収集組織の基礎が川上操六によって確立された点を指摘するなど多くの示唆に富む。この佐藤氏の研究はどちらかというと明治後期に重点を置いており、同前期を対象とする関氏の著作と合わせて、明治日本のインテリジェンスを理解する上での起点となる必読文献である。
- (12) この旅行についてはすべて福島安正述「多倫諾爾紀行」「多倫諾爾紀行第二回」『東京地学協会報告』2巻9号（発行年月不明）、3巻4号（1881年12月）を参照・引用した。福島が1881年2月26日、9月24日の2度に分けて東京地学協会で行った講演記録である。いずれも、ゆまに書房, 1990年発行の復刻版を利用した。なお『東京地学協会報告』（のち『地学雑誌』）には情報将校の紀行が数多く掲載されているが、記事タイトルを検索するには『東京地学協会報告 地学雑誌 総目録』（東京地学協会, 1981年）、あるいは公益社団法人東京地学協会ウェブサイトの「講演会」欄中にアップされている「例会開催報告」（1879～1966年）が便利である。また同協会と情報将校の関係に関しては安岡昭男「初期の東京地学協会と軍人」『政治経済史学』第40号, 1999年12月が、協会の組織と性格については石田龍次郎『東京地学協会報告』（明治12-30年）— 明治前半の日本地理学史資料として — 一橋大学研究年報『社会学研究』第10号, 1969年3月（一橋大学機関リポジトリからダウンロード可能、のち石田『日本における近代地理学の成立』大明堂, 1984年に同文収録）が参考となる。
- (13) 引用にあたっては、読みやすさを考慮して原文に適宜句読点を補った。また漢字の旧字体は新字体に、省略仮名は通常のカタカナや漢字に改めた。以下同様。
- (14) 西村榮雄『堀江芳介壬午軍乱日記』（みずのわ出版, 2018年）、12-13, 21頁。
- (15) 杉山直矢, 福島安正『支那沿岸紀行』第1, 2編、『清国沿岸紀行附録 煙津沿道地誌』, 杉山直矢『支那沿岸紀行』第3編。このうち第1編のみ明治16〔1883〕年5月の日付が記載されている。いずれも拓殖大学文京図書館所蔵。

ここで上記の資料を紹介しておく、この調査報告書『支那沿岸紀行』は第1編(79頁)、第2編(127頁)、『清国沿岸紀行附録 煙津沿道地誌』(以下『附録 煙津沿道地誌』と略称)(109頁)、第3編(二分割、合わせて97頁)の4点から成り、合計412頁におよぶものである。そのうち第1,2編はいずれも和紙野紙を用い、杉山、福島の名で記されており、第1編は横浜出航から上海・南京まで、第2編は上海から煙台を経て北京までの状況を日ごとに記録している。スケッチもいくつか挿入されており、第1編巻末に「各国東洋艦隊略表」、第2編巻末に「沿道各地物価表」が付されている。また『附録 煙津沿道地誌』は同じく和紙野紙を用い、第2編の中でとくに煙台から天津までの陸路に焦点を絞り、その状況を整理した地誌資料で、のちに同じ地域を訪れる者のガイドブックにもなるよう配慮されているが、実質的な内容は第2編の記述と大きく変わらない。以上の第1編、第2編、『附録 煙津沿道地誌』は端正な文字で丁寧に清書されており、参謀本部管西局に提出した原本の控えとして保管されていたものではないかと考えられる。

さらに第3編は杉山のみ氏名が記され、北京で福島と別れた杉山が単身で水(海)路、北京、天津から煙台経由で上海にもどり、そこから沿岸中南部(寧波、福州、広州、香港)を廻った分が叙述されている。用紙は第1編、第2編、「附録 煙津沿道地誌」よりやや小さい和紙の参謀本部用箋を用い、二分割して綴じられている。削除や加筆など推敲の跡が目立ち、管西局に提出した報告書の草稿ではないかと推察される。保存状態は他に比して芳しくなく、所々虫損が見られるが、ほとんどの文字は判読が可能である。杉山自筆と考えられるこの第3編はそれ以外のものと筆跡はもとより、文言や表現に違いが見られるため、第1,2編は福島が作成した可能性が高い。ただし第1編の弁言(序文)は編者を代表して杉山名で書かれている。その序文によると、この『支那沿岸紀行』は全3編を通じて、地理・兵備・雑事など「苟も見聞ニ係ル者〔物〕ハ網羅シテ之ヲ遺サズ皆ナ逐日記入」したものであり、他日の兵要地誌編纂の参考に供することを想定していた。

なお拓殖大学文京図書館所蔵の『支那沿岸紀行』の資料群の一つとして、そのほかに「清国戍兵ノ表」と題した16頁の綴り(参謀本部用箋)がある。これは香港の守備兵の状況を記したものであるが、赤沢良斎訳とあり、同地を訪れた杉山自身が観察・記録したものではない。その綴りには「天津港小銅銭ノ算法」「1882年5月4日 広東広西ノ総督及ヒ広東ノ海關ニ属スル軍艦ノ表」と題した野紙、一覧表も挟みこまれており、いずれも偵察旅行に関連したメモ、参考資料であることがわかる。

- (16) 「清国派出将校心得」「清国派出将校兵略上偵察心得」『参謀本部歴史草案』二(1879年)(復刻版『参謀本部歴史草案』第1巻「参謀本部歴史草案」一〜三 明治4年〜13年、ゆまに書房、2001年)所収、144-163頁。
- (17) 小林茂、渡辺理絵、山近久美子「中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争」90頁、小林基、藤山友治「表目録1-1 アメリカ議会図書館蔵 初期外邦測量原図 中国大陸の部」222-23頁、いずれも小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』(大阪大学出版会、2017年)所収。
- (18) 山近久美子、渡辺理絵、小林茂「広開土王碑文を将来した酒匂景信の中国大陸における活動——アメリカ議会図書館蔵の手描き外邦図を手がかりに——」小林編、同上所収、172-73頁。
- (19) 小林、渡辺、山近「中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争」87-88頁。当時の陸軍将校の中国大陸における偵察と測量については、小林茂『外邦図——帝国日本のアジア地図——』(中公新書、2011年)も合わせて参照のこと。
- (20) 『支那沿岸紀行』第1編、1882年10月20日。
- (21) 『附録 煙津沿道地誌』の表紙を含めて33頁目、朱橋駅の項。
- (22) 同上、表紙を含め23, 63, 71, 86, 90, 96枚目、および2枚目(凡例)。
- (23) ①から③について、以下の文献を参照もしくは引用した。檜木野宣「清代の緑旗兵——三藩の乱を中心として——」『群馬大学紀要 人文科学編』第2巻、1953年3月、小野信爾「李鴻章の登場——淮軍の成立をめぐる——」『東洋史研究』16巻2号、1957年9月、小野信爾「淮軍の基本的性格をめぐる——清末農民戦争の一側面——」『歴史学研究』第245号、1960年9月、波多野善大『中国近代軍閥の研究』(河出書房新社、1973年)、佐々木寛「清朝の軍隊と兵変の背景」『社会文化史学』第

9号, 1973年7月, 坂野正高『近代中国政治外交史 — ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで —』(東京大学出版会, 1973年), 佐々木寛「緑営軍と勇軍」『木村正雄先生退官記念 東洋史論集』(木村正雄先生退官記念事業会 東洋史論集編集委員会発行, 汲古書院発売, 1976年)所収, 佐々木寛「洋務と練兵」『中嶋敏先生古稀記念論集』上巻(中嶋敏先生古稀記念事業会発行, 汲古書院発売, 1980年)所収, 佐々木寛「練軍について」岡本敬二先生退官記念論集刊行会編『アジア諸民族における社会と文化 — 岡本敬二先生退官記念論集 —』(国書刊行会, 1984年)所収, 大谷敏夫『清代政治思想史研究』(汲古書院, 1991年), 河内良弘「辛亥革命前後の満族社会の変化について」研究代表者・河内編『清朝治下の民族問題と国際関係』(平成2年度科学研究費補助金 総合研究(A) 研究成果報告書, 1991年3月)所収, 菊池秀明「太平天国における私的結合と地方武装集団」『歴史学研究』第880号, 2011年6月, 岡本隆司『李鴻章 — 東アジアの近代 —』(岩波新書, 2011年), 根無新太郎「1860年代における神機營について — 清末の北京朝廷と地方督撫に関する一考察 —」『史林』98巻4号, 2015年7月, 澁谷由里『〈軍〉の中国史』(講談社現代新書, 2017年), 根無新太郎「1860年代, 清朝中央による首都防衛構想について — 直隸練軍試論を兼ねて —」『東洋学報』99巻4号, 2018年3月。

- (24) 『支那沿岸紀行』第1編, 1882年10月4日。
 (25) 同上, 10月5日。
 (26) トーマス・L・ケネディ著, 細見和弘訳『中国軍事工業の近代化 — 太平天国の乱から日清戦争まで —』(昭和堂, 2013年), 138-40頁。原書は, Thomas L. Kennedy, *The Arms of Kiangnan: Modernization in the Chinese Ordnance Industry, 1860-1895* (Boulder, Colorado: Westview Press, 1978).
 (27) 『支那沿岸紀行』第1編, 1882年10月5日。
 (28) ケネディ『中国軍事工業の近代化』139-43, 165-66, 199頁。細見和弘訳「トーマス・ケネディ著『李鴻章と江南製造局(1860-1895)』」『立命館経済学』59巻1号, 2010年5月, 107頁。
 (29) 『支那沿岸紀行』第1編, 1882年10月7日。
 (30) 同上, 10月8日。
 (31) 同上, 10月9-10日。
 (32) 同上, 10月9日。
 (33) ケネディ『中国軍事工業の近代化』144-46, 178-79頁。
 (34) 『支那沿岸紀行』第1編, 1882年10月10日。
 (35) 同上。
 (36) 同上, 10月11日。
 (37) 同上。
 (38) 杉山, 福島『支那沿岸紀行』第2編, 1882年11月3日。
 (39) 同上, 10月18日。
 (40) 同上。
 (41) 同上, 10月23日。
 (42) 同上, 10月24-25日。
 (43) 同上, 10月27日。
 (44) 同上, 10月30日。
 (45) 同上, 11月2日。
 (46) 同上, 11月4日。
 (47) 同上, 11月5日。
 (48) 同上, 11月9日。
 (49) 同上, 11月11日。
 (50) 同上, 11月12日。

- (51) ケネディ『中国軍事工業の近代化』64, 89-90, 93, 147-48, 150頁。
- (52) 『支那沿岸紀行』第2編, 1882年11月15日。
- (53) 同上, 15-16日。16日の個所に翌17日に謝絶の回答を受けたことが記されている。
- (54) 同上, 16日の個所に19日の会合が記されている。
- (55) 杉山直矢『支那沿岸旅行』第3編, 1882年12月7-8日。
- (56) 同上, 12月16-18日。
- (57) 同上, 12月22日。
- (58) 同上, 12月24日。
- (59) 同上, 12月26, 29日。
- (60) 松本三之介『近代日本の中国認識——徳川期儒学から東亜協同体論まで——』(以文社, 2011年)。
- (61) 金山泰志『明治期日本における民衆の中国観——教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇に注目して——』(芙蓉書房出版, 2014年)。
- (62) 中山隆博「教養としての中国——規範の鑑と蔑視の対象の間で——」岩波講座 日本の思想 第3巻『内と外——対外観と自己像の形成——』(岩波書店, 2014年)所収。
- (63) 伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』(緑蔭書房, 1996年)所収, 155-56頁。
- (64) 豚尾は弁髪 (pigtail) をもじった清国人に対する当時の蔑称。先行研究によると, 明治初期に清国を旅行した日本人の間では, 中国人がヨーロッパ文明に対して非常に拒否的であって, 自己変革をしようとしないうという面を書くものが多く, 日本が国民国家を形成していくにつれて, その日本の国民国家をモデルにして中国を批判する, あるいは見るということが共通して強くなった。たとえば1884年に同国を訪れた尾崎行雄が示したように, 中国人には国家観念, 公共観念が欠如しており, 彼らは徹底して個人主義, 利己主義をとり, 私利ばかりを追求しているという見方が一つの共通したタイプとして表れるようになっていった(小島晋治『近代日中関係史断章』岩波現代文庫, 2008年, 96-101頁)。そうした当時の日本人の中国観を概観するには, 楊棟梁主編, 劉岳兵著『近代以来日本の中国観』第3巻(1840-1895)(南京:江蘇人民出版社, 2012年)が便利である。他方, 日本の近代化に着目していた李鴻章のような人物は別として, 清国人は「蕞爾たる〔非常に小さい〕小国」「倭人は矮小, 土地は澆薄」などの表現を用いて日本を弱小国視しがちであった。清国政界では, 日本との間に戦争が起こった場合は, 国土面積・人口・経済力・兵力その他あらゆる面からいって, 清の勝利ははじめから疑う余地がないとする観測が一般的であり, そうした見方は民間でも盛んで, 日本軍の素質は劣等である, 日本軍の指揮官は近代戦術をわきまえない, 日本の艦船は本土の防備だけでも不足であり, いわんや何ぞ大國と争うことができようか, 日本国民の素質は知能低劣で, 一朝一夕に改善するのは難しいといった日本軽視と楽観的予測が流れていた(佐藤三郎「日清戦争と中国」『軍事史学』4巻4号, 1969年2月, 6-7頁)。
- (65) 『支那沿岸紀行』第1編, 10月5日。
- (66) 同・第2編, 10月18, 20日。
- (67) 同・第1編, 10月9日。
- (68) 同・第2編, 10月21日。
- (69) 同上, 11月3日。
- (70) 同上, 10月31日。
- (71) 同上, 11月6日。
- (72) 同上, 10月20-21日。
- (73) 同上, 10月21日, 11月4日。
- (74) 同上, 10月23日。
- (75) 同上, 11月9日。
- (76) 同上, 11月11日

- (77) 同・第1編, 10月9日。
- (78) 同上, 10月9-11日。
- (79) 同・第2編, 10月28日。護照を見せて脅すだけではなく、本当に地方官に訴え出たこともあった。登州府の旅店は先に触れたように店内に「馬糞堆積」, 「其不潔能ク筆紙ノ尽ス所ニ非ルナリ」といった状態であったため、福島が馬夫1人を連れてほかの宿屋を探しに行った。手ごろで大きな旅店が見つかったが、店主が宿泊を拒んだため、福島は県庁に行ってその不礼を唱え、案内を要請した。そこで属吏2名が福島とともに旅店に赴くと、店主は「依々諾々一句ノ言ナシ」であった。このように官を恐れるのは圧制が甚だしいからだと福島は書いている。その後、別の属官が来て宿に入った2人の護照を檢視して帰っていった(同上, 10月21日)。
- (80) 同上, 10月28日。
- (81) 同上, 10月29日。
- (82) 同上, 11月6-7日。
- (83) 同上, 11月8日。
- (84) 同上, 11月1日。
- (85) 同上, 11月6日
- (86) 同上, 11月8日。
- (87) 杉山「支那沿岸紀行」第3編, 12月8日。
- (88) 1883年11月13日付, 福島安正より福島貞子夫人宛, 「福島関係文書」40。
- (89) 福島安正自筆「慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (90) 1884年3月12日付, 福島安正より杉山直矢宛, 国立国会図書館憲政資料室所蔵・憲政資料室収集文書「杉山直矢関係資料」(以下「杉山資料」と略称) 348-13。
- (91) 同上。そのほかにも福島は、妻に依頼して油画, 錦画を送ってもらっていた(1883年11月13日付, 福島より貞子夫人宛, 「福島関係文書」40)。それらも相手方を懐柔するために用いたのであろう。
- (92) 小林, 藤山「表目録1-1 アメリカ議会図書館蔵 初期外邦測量原図 中国大陸の部」224頁。この図はアメリカ議会図書館(Libraray of Congress)のウェブサイトで「Seizan Gaikakiei Kayakukyoku zu」と入力すれば、画面上で閲覧が可能である。
- (93) 1884年3月12日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-13。
- (94) 東亜同文会編『対支回顧録』下巻(原書房, 1968年), 260, 307, 261頁。
- (95) 1883年5月10日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-2。
- (96) 1884年2月25日付, 福島より貞子夫人宛, 「福島関係文書」30。
- (97) 1884年7月14日付, 福島安正より山県有朋参謀本部長宛, 「参謀本部特別報告」(天理大学附属天理図書館所蔵, 081-イ27-18)第53号。
- (98) 1884年8月12日付, 福島安正より杉山直矢宛, 国立国会図書館憲政資料室所蔵・憲政資料室収集文書「参謀本部管西局報告書類(杉山直矢関係資料)」(以下「管西局杉山資料」と略称) 1481-50。
- (99) 1884年7月30日付, 八郎〔沢八郎, 小沢豁郎の偽名〕より杉山宛, 「杉山資料」348-38。
- (100) 1884年8月7日付, 八郎〔小沢〕より島弘毅宛書簡に記された島の書き込み, 「杉山資料」348-43。
- (101) 1884年3月12日付, 福島より山県参謀本部長宛, JACAR(アジア歴史資料センター): Ref. C11081204900, 川村伯爵より還納書類 16「情報, 調査(朝鮮)」(防衛省防衛研究所)。
- (102) 1884年7月14日付, 福島より山県宛, 「参謀本部特別報告」第53号。
- (103) 1884年7月21日付, 福島より山県宛, 「参謀本部特別報告」第56号。本註と前註の個所は, 註(11)の小林「明治期日本参謀本部の対外情報活動」399-400頁ですでに紹介されているが, より正確な引用と出典表記を期した。
- (104) 1884年1月22日付, 島より杉山宛, 「杉山資料」348-6。
- (105) 1884年9月1日付, 島村千雄より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-56。
- (106) 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』169-175頁。関氏は情報活動を統括する参謀

本部第二局長の小川又次、福島、荒尾の対清認識を比較し、1886 年末前後に彼らの認識と政策論はほぼ共通し、福島が到達した清国衰退論的な対清認識が小川や荒尾といった参謀本部の主要情報関係者にも受け継がれ、確認されていったとする (176 頁)。この箇所も含めて、同書は多くの重要な指摘と示唆に富んでいる。

- (107) 渡辺修「清代の歩軍統領衙門について」『史苑』41 卷 1 号, 1981 年 4 月, 3, 21, 27-28 頁。
- (108) 前掲, 註(23)の佐々木寛「緑営軍と勇軍」348-55 頁, 同「練軍について」381, 397 頁。そのほかの研究者も清国軍の上下腐敗と劣化をあげ、それが清国社会全体の構造の反映であったこと、また装備の標準化の欠如、指揮官が基本的な戦略戦術、武器の使用に無知であることがその大きな弱点であったことを指摘している。Ralph L. Powell, *The Rise of Chinese Military Power 1895-1912* (Port Washington, NY: Kennikat Press, 1972), 17-19, 39, 49-50.
- (109) 佐々木寛「緑営軍と勇軍」352-53, 同「練軍について」396 頁。
- (110) 1884 年 1 月 17 日付, 福島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-13。
- (111) 1884 年 8 月 19 日付, 福島より山県宛, 「参謀本部特別報告」第 60 号。
- (112) 1884 年 3 月 13 日付, 八郎〔小沢〕より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-17。
- (113) 1884 年 8 月 26 日付, 島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-54。
- (114) 1884 年 2 月 25 日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-63。
- (115) 福島安正編『隣邦兵備略』第 2 版, 第 1 卷 (明治 15 年 8 月, 陸軍文庫), 1 丁。同第 3 版, 第 1 卷 (明治 22 年 3 月, 参謀本部), 4-5 丁。
- (116) 『隣邦兵備略』については, 安岡昭男『「隣邦兵備略」と山県有朋』『法政大学文学部紀要』第 12 号, 1967 年 3 月 (のち安岡『明治前期大陸政策史の研究』法政大学出版局, 1998 年に収録) を参照のこと。
- (117) 1884 年 4 月 2 日付, 福島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-26。
- (118) 島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上, 85-87 頁。先に触れたように同書は, 福島が兵部衙門の将校・呉上尉とその部下たちを使っていたとする。
- (119) 1884 年 4 月 22 日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-16。
- (120) 1884 年 2 月 25 日付, 福島より貞子夫人宛, 「福島関係文書」30。
- (121) 1884 年 5 月 12 日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-17。
- (122) 1884 年 7 月 10 日付, 福島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-45。
- (123) 1884 年 5 月 20 日, 6 月 4 日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-20, 348-23。現時点において林がだれであるかを特定はできないが, そのほかに彼の管理下にあった牧野留五郎中尉を牧氏, 東靖民 (倉辻明俊中尉の変名) を東氏と表記しているので, 林氏も林田などの苗字を略している可能性がある。
- (124) 1884 年 8 月 27 日付, 福島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-55。
- (125) 1884 年 2 月 25 日, 4 月 8 日付, 福島より貞子夫人宛, 「福島関係文書」30, 32。
- (126) 1884 年 4 月 16 日, 7 月 8 日付, 福島より貞子夫人宛, 「福島関係文書」33, 37。
- (127) 福島安正編『清国兵制類聚』(天理大学附属天理図書館所蔵, 081-イ27-11)。全 65 巻であるが, 天理図書館では巻之 31 から 34 と巻之 38 の合計 5 冊が欠号となっている。
- (128) 同上, 巻之 4, 36-38, 43 丁。
- (129) 同上, 巻之 40, 10-11 丁。そのほかに, やはり禁旅八旗の護軍営も「軍紀錯乱」しており, 訓練中, 隊列外で喫煙, 談笑している者もいた。福島が彼らに話しかけると, 常に飢渴している者がどうして演練などに心を集中できるのかと答えたという。護軍営では武器の手入れも行われておらず, 兵器は腐蝕し, とくに抬槍 (大型火縄銃) は「一塊ノ朽木」のようであった (同上, 巻之 39, 35 丁)。
- (130) 同上, 巻之 5, 10, 42 丁。
- (131) 『金陵機器製造局造呈』(天理大学附属天理図書館所蔵, 081-イ27-14)。
- (132) 『広東報銷総局造報善後第三案調派旗營官兵習』(天理大学附属天理図書館所蔵, 081-イ27-20)。

- (133) 『准軍報総局造呈』(天理大学附属天理図書館所蔵, 081-イ27-13)。
- (134) 福島安正編『隣邦兵備略』第3版, 全6巻+付図1巻(1889年3月, 参謀本部)。
- (135) 『隣邦兵備略』第3版, 第1巻4丁, 第2巻28-30, 47丁, 第3巻3, 13, 17丁。
- (136) 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』第3章第1節を参照のこと。
- (137) もちろん福島以外の派遣将校たちが現地で地道に集めた地図情報や兵要地誌のデータも見逃すことができない。たとえば『清国直隸沿道指鍼』(1887年3月, 首都大学東京図書館本館・松本文庫(図書部)所蔵)と題した活字印刷文献がある。これは木村宣明大尉の記した凡例によると, 福島がインドから持ち帰った該国指鍼〔指針〕の体裁にならない, 清国駐在将校の作成した地図ならびに紀行をもとに編纂したものであり, 参謀本部の保管資料の1つであったと考えられる。形式は北京を含む直隸省の主要道路を番号1~239に区分し, その特徴を表にデータベース化した便覧である。道路ごとに以下の事項が簡潔に記載されている。すなわち各駅間の距離, 地形の特徴, 河川名, 橋梁の状況(石橋, 土橋, 木橋か, 渡し船か, 徒歩可能か), 道路の状況, 土質, 雨天時の状態, 騎砲兵の運動可能性, 車輛通過の是非, 砲台・城郭の状況, 飲用可能な水場とその水質, 農産物や牛馬の飼育状況, 食糧・軍需品徴発が可能な地点, 村落の貧富度, 町の商況, 富農・豪商の有無, 水運, 運河, 渡し場, 渡し船の大きさや積載量(たとえば「野砲二門或ハ兵一百名ヲ載スルヲ得ル」)などである。直隸省以外についてもそうした便覧が作成されていたかどうかは不明であるが, 同資料から派遣将校がいかに詳細かつ多量のデータを集めていたか, その一端をうかがうことができる。このように参謀本部では福島の編纂したもの以外にもさまざまな情報が蓄積されていた。
- (138) 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』第3章第1節を参照のこと。
- (139) 1884年3月12日, 4月22日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-13, 16。
- (140) 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』120頁。
- (141) 1884年6月17日付, 福島より杉山宛, およびそれに書き込まれた杉山のコメント, 「杉山資料」348-25。
- (142) 1884年8月13日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-35。同年7月8日付, 福島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-43。また福島は, 倉辻が捕縛された一因が外務省から派遣された曾根俊虎(海軍大尉), 町田実一, 東次郎, 清水元一郎の不用意な情報活動が清国当局の警戒を刺激したことであった(関, 前掲書120-21頁)ため, この4人に対して強い怒りを感じており, 彼らが「一個之虚名ヲ貪り, 大体之利害ヲ顧ミサルノ所業ヨリ招キシ害毒不少, 実ニ憤激ニ堪ヘス」と記している。さらに倉辻を天津に護送する際に, 曾根がやはり天津に来るという話を聞き, 「実ニ不都合千ワト云フベシ」と怒りを増幅させた(1884年7月1日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-28)。
- (143) 1884年11月2日付, 島村干雄より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-65。
- (144) 1884年11月26日付, 島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-71, 同年9月9日付, 八郎〔小沢〕より杉山宛, 1885年2月14日付, 島村干雄より杉山宛, 「杉山資料」348-48, 67。
- (145) 1884年6月17日, 7月1日, 8月13日付, 福島より杉山宛, 「杉山資料」348-25, 28, 35。1884年9月9日付, 福島より杉山宛, 「管西局杉山資料」1481-57。
- (146) 戸部良一『日本陸軍と中国——支那通にみる夢と蹉跎——』(講談社, 2005年第7刷), 25-26頁。
- (147) 1884年8月7日付, 八郎〔小沢〕より島宛, および書面に記された島の書き込み, 8月23日, 9月9日付, 八郎〔小沢〕より杉山宛, 「杉山資料」348-43, 45, 48。
- (148) 小沢については, 田中正俊「清仏戦争と日本人の中国観」『思想』第512号, 1967年2月(のち田中著, 『田中正俊歴史論集』編集委員会編『田中正俊歴史論集』汲古書院, 2004年に収録), 安岡昭男「小沢豁郎と清仏戦争・清国観」『政治経済学』第500号, 2008年4月を参照のこと。小沢には『清仏戦争見聞録』『碧蹄蹂躞記』(どちらも1891年5月, 豊島鉄太郎発行)などの著書, 訳書があり, 前二書には清国軍の腐敗, 弱体が記されているが, やはりエモーショナルな表現が散見される。
- (149) 島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上, 80-89頁, 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェ

ンス』108-110頁を参照のこと。ちなみに関氏が同書109頁で紹介している芝罘（煙台）周辺の軍備を報じた福島から榎本宛の書簡は、1884年に福島が駐在武官の任を終えて帰国する途中に書き送ったものである。「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」に、このとき天津から芝罘、牛荘に寄港し、倉辻の事情を詳細探究したとの旨が記されている。

付 記

本稿の作成にあたっては、平成30年度・拓殖大学政治経済研究所研究助成金を活用させて頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

（原稿受付 2019年11月8日）